

げんこつ団

『1/0』

ゼロ分のイチ

2023年 11月15日(水)〜11月19日(日) 小劇場楽園

植木早苗

春原久子

河野美菜

丹野薫

池田玲子

三明真実

工藤彩

一十口裏

脚本・映像・音響・演出 一十口裏

振付・演出 植木早苗

照明

山岡茉友子

音響才ペ

吉田有花

舞台装置

畠山秀樹

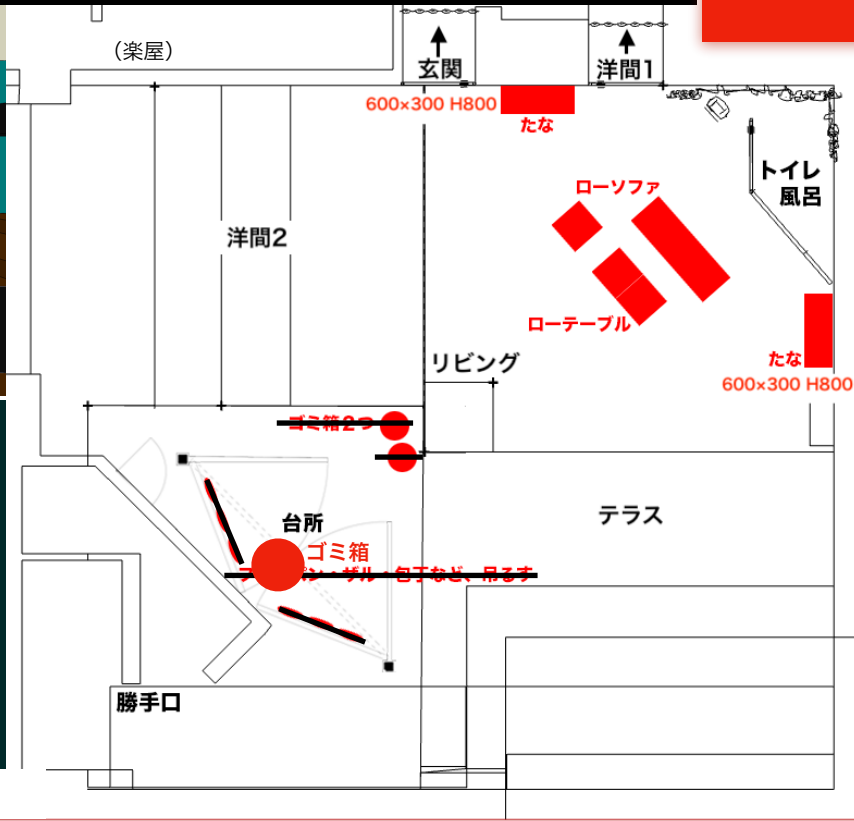
映像才ペ

信広天音

ドア閉じ 通常時

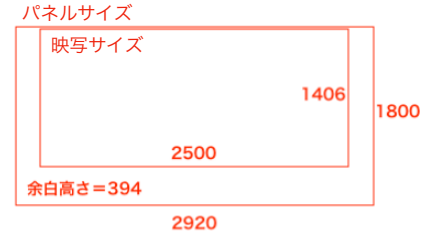


↑ドアを閉じると、ぶら下がっている女性の身体が見える。



Casa 万

カーサよるず 2LDK 築41年 全面リフォーム済
下北沢駅から徒歩1分 世田谷区北沢2-10-18 B1

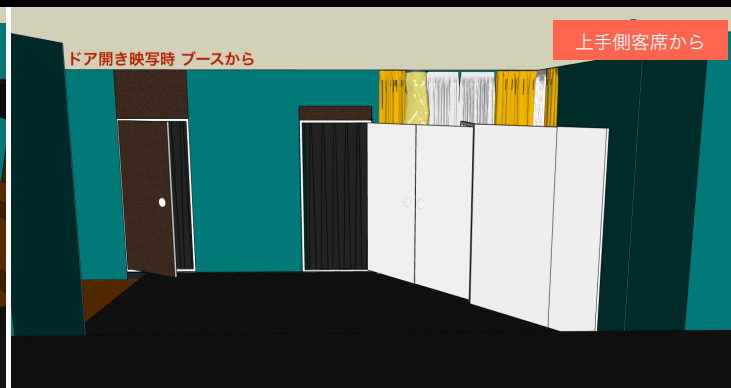
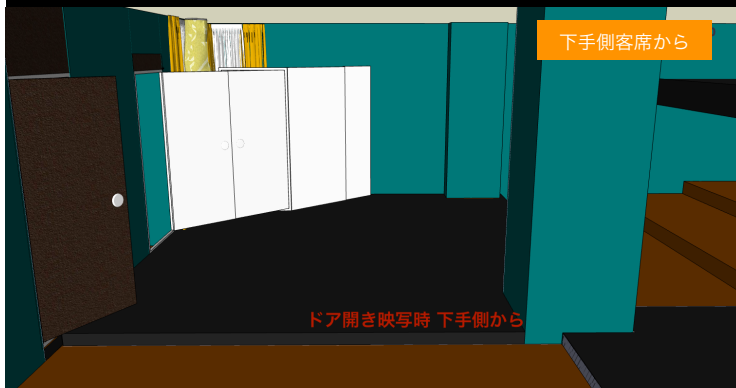


パネルサイズ 2920×1800
映写距離 5510
映写サイズ 2500×1406.25~
2920×1642.5

ローソファ2人掛け 1400×400 H350
ローソファ1人掛け 400×400 H350
※背もたれなし
ローテーブル 800×400 H350

たなは『ファクト・リ』のものを再利用
ゴミ箱、フライパンなどは購入

ドア開き 映写時 (& 客入れ時)



↑ドアを開け、ドア同士が丁度合わさると、ぶら下がっている女性の身体が隠れる。(映写パネルになる)



よろず家 年表メモ

46年前 1977年 零次・零奈：ムサシノ美術大学
 43年前 1980年 結婚 零次：イラストコンペ多数入選&受賞 零奈：服飾デザイン事務所
 41年前 1982年 一香誕生 マンション地下物件 自宅兼アトリエ 零次：イラストレーター
 40年前 1983年 十里誕生 零次：ほぼ帰宅せず

零次（20才） 零奈（20才）
 零次（23才） 零奈（23才）
 零次（25才） 零奈（25才） 一香（0才）
 零次（26才） 零奈（26才） 一香（1才） 十里（0才）

1991～1993 バブル崩壊

27年前 1996年 一香：中学美術部 | 十里：中学入学 | 零奈：フリーに
 24年前 1999年 一香：ソウゴウ工科高等学校 | 十里：ロカ高等学校入学 陸上部

零次（39才） 零奈（39才） 一香（14才） 十里（13才）
 零奈（42才） 一香（17才） 十里（16才）

1993～2003頃 就職氷河期

19年前 2004年 一香：服飾雑貨卸企業 | 十里：コマザワ大学 | 零次：行方知れず
 18年前 2005年 十里：ミツイ不動産 | 五朗：同大卒 就職浪人 | 零奈：体調不良
 17年前 2006年 一香：転職 | 十里：結婚 | 零奈：多次元リニューアル開始
 16年前 2007年 A号室=零奈・一香 | B号室=五朗・十里 | (C号室=劇場)
 14年前 2009年 十里：出産・退職 | 五朗：職転々 | 零奈：体調悪化 | B号室=五朗・十里・千紘

零奈（47才） 一香（22才） 十里（21才）
 零奈（48才） 一香（23才） 十里（22才）
 零奈（49才） 一香（24才） 十里（23才）
 零奈（50才） 一香（25才） 十里（24才）
 零奈（52才） 一香（27才） 十里（26才）

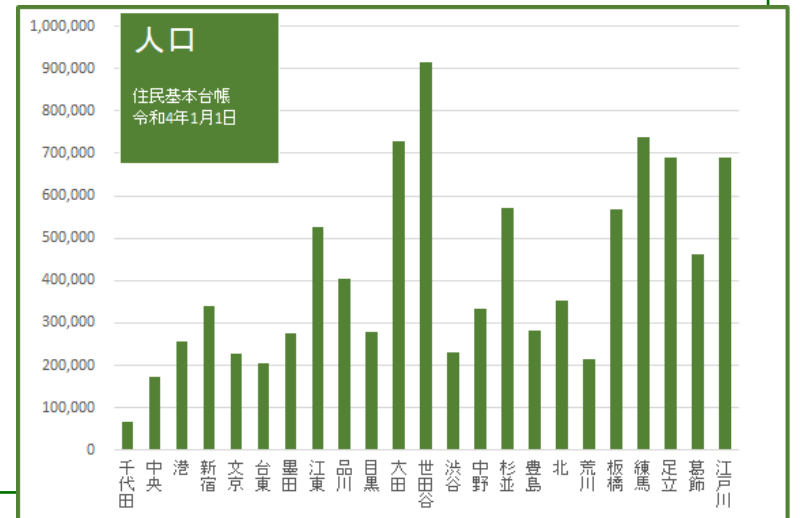
2011 東日本大震災

11年前 2012年 一香：数回転職後フリー | 十里：ミツイ関連パート | 五朗：アパマン | 零奈：部屋を増やす
 10年前 2013年 A号室=零奈 | B号室=一香 | C号室=五朗・十里・千紘 | (D号室=劇場)
 09年前 2014年 一香：仕事途絶える | 十里：離婚(千紘6才) | 零奈：部屋を増やす
 08年前 2015年 A号室=零奈 | B号室=一香 | C号室=十里・千紘 | D号室=賃貸 | (E号室=劇場)
 05年前 2018年 零奈：部屋を増やす
 04年前 2019年 A号室=零奈 | B号室=一香 | C号室=十里・千紘 |
 D号室=春奈・夏希(派遣社員・プログラマー、カップル) |
 E号室=秋野(離婚後、一人暮らし) | (F号室=劇場)

零奈（55才） 一香（30才） 十里（29才）
 零奈（56才） 一香（31才） 十里（30才）
 零奈（57才） 一香（32才） 十里（31才）
 零奈（58才） 一香（33才） 十里（32才）
 零奈（61才） 一香（36才） 十里（35才）
 零奈（62才） 一香（37才） 十里（36才）

2020 新型コロナ第一波

01年前 2022年 零奈：もっと部屋を増やす
 00年前 2023年 G号室～空き部屋



主な登場人物

万 零奈 (母 66才)	失踪中	A号室
万 一番 (長女 41才)	丹野薫	B号室
万 十里 (次女 40才)	植木早苗	C号室
万 千紘 (十里の息子 14才)	河野美菜	C号室
五朗 (十里の元旦那 40才)	春原久子	不動産屋
茜 (初めての上京 20才)	工藤彩	G号室
春奈 (住人女性 38才)	池田玲子	D号室
夏希 (住人女性 29才)	三明真実	D号室
秋野 (住人男性 55才)	一十口裏	E号室
その他もろもろ	全員	
董 (茜の祖母 78才)	植木早苗	故郷

場所

Casa万 (カーサよるぞ)

多次元物件 ラウンジ、A号室、B号室、C号室、D号室、E号室、F号室、G号室、

全配役 (※登場順でなく)

植木早苗 十里・五朗(別人格)・・・男1(ドーパミン)・・・マナティ・・・百十里・・・作業員・・・朱肉・・・董
 春原久子 五朗・十里(別人格)・・・女2(フルアドレナリン)・・・アシカ・・・六朗・・・心臓・・・千紘(その後)
 河野美菜 千紘・・・女1(セロトニン)・・・セイウチ・・・肺・・・赤子・・・中年男性・・・馬(千支)
 丹野 薫 一番・・・溶けカス
 池田玲子 春奈・十里(別人格)・・・男2(アドレナリン)・・・ジユゴン・・・二葉・・・男警官・・・胡麻団子
 三明真実 夏希・千紘(別人格)・・・女警官・・・配達員・・・初老男・・・馬(口デオ)
 工藤 彩 茜
 一十口裏 秋野・・・百零奈・・・爺さん・・・部下・・・配管工

げんこつ団

『1/0』

ゼロ分のイチ

Scenes

内見	サブライズ・物件案内	失踪から三日目。	01
Film OPENING 思慮深度			08
ご契約 1	別人格 1 (一香と零奈)	一香は一人ぼっち。	08
ご契約 2	発電 1 (茜と葦・春奈と夏希)	茜が入居を決める。過疎地の発電。	10
入居日 1	溶けカス・漏電 1 (五朗と千紜)	失踪から六日目。部屋の漏電。	14
入居日 2	応援・先住民・心肺機能 1 (部屋)	空き部屋に居た者たち。	19
搜索開始	お茶回し・ダンス 1 (仕事・一香と十里)	搜索が開始される。	24
Film 搜索活動			31
搜索中 1	侵入者・掃除機・ヘッドホン 1 (十里と五朗)	失踪から二週間。一香は嫌々大家を務める。	31
搜索中 2	本部長・脳内物質・別人格 1 (一香と零奈)	搜索の終わりが見えなくなる。	39
Film ムーブメント			44
テナント	陰謀論・開店 1 (一香・十里)	失踪から明日で五十日。	45
新入居者	ロデオ・新入居者・解脱 1 (一香・春奈・夏希)	無視の出来ない新入居者たちがやって来る。	49
昇天	資格・昇天 1 (一香)	一香はここを去ることを目論む。	54
Film ENDING 見なかったこと			58

舞台下手にドアが二つ。手前は玄関に続くドアで、奥は洋間に続くドア。

舞台奥にもドアが一つ。洗面所とトイレに続くドア。その辺りにカラフルなカーテンが掛かっている。

下手端と上手端には小さな棚が一つづつ。劇中に使用する小道具が乗っている。

舞台中央にはカーペット。その上に3人掛けと一人掛けの小さなソファとローテーブルが置かれている。

客席の間のスペースの奥に、ポリバケツのゴミ箱が一つ。

客入れ中は、下手奥のドアと洗面所のドアが開けっぱなしになっており、

そのドアとドアがびったりと合わさり、ちょうどその後ろを隠すようになっている。

隠された部分の奥に、カラフルなカーテン。

開演時刻になったら、開演音楽イン。ゆっくりと客電アウト。

しばし音楽のみの状態で舞台上セッティングしたら、音楽カットアウト。

内見

サブライズ・物件案内 ー ラウンジ／G号室／B号室／C号室／D号室

暗闇のまま少ししたら、スイッチを叩く音で部屋の電気がつく。

春奈が玄関に続くドアを開けている。カーサ万、ラウンジ。

一香は柱の向こうから、十里はソファの後ろから、千紘は奥のドアから、一斉に飛び出す。

一香と十里は浮かれたパーティー帽子を被り、千紘は一段と浮かれた格好をさせられている。

十里 サブライズ！

一香 フーウ！

千紘 (無表情でクラッカーを鳴らす)

春奈 …ごめんなさい。

春奈の声をキッカケに、また一斉にソファに柱に隠れる一香と十里。春奈も素早くドアを閉め、隠れる。

同時に千紘がスイッチを叩く。暗転。

少ししたらまた部屋の電気がつく。夏希が同じく玄関に続くドアを開けている。先程と全く同じように。

十里 サブライズ！

一香 フーウ！

春奈 ヤー！（パーティー帽子を被っておりソファ後ろから飛び出し歓声をあげる）

千紘 (無表情でクラッカーを鳴らす)

夏希 …ごめんなさい。

夏希の声をキッカケに一斉にソファに柱に隠れる一香と十里と春奈。夏希も素早くドアを閉め、隠れる。

同時に千紘がスイッチを叩く。暗転。

少ししたらまた部屋の電気がつく。五朗が小さめにドアを開けている。五朗は書類を持っている。

五朗 ごめんくだ(さい)

十里 サブライズ！(しかし五朗の顔を見て直ちに) ああああああああ…！(帽子を投げつける)

一香 もおおおおおおお…！(同じく投げつける)

春奈 んだよバカ！

夏希 死ね！

千紘 (無表情でクラッカーを鳴らす)

五朗 えっ。

千紘 (ドア横の電気スイッチを叩く)

五朗 あ。

暗転。

五朗(声) 何をして(るんですか)

十里(声) シッ！

一香(声) 静かに！

五朗(声) いやサブライズ、ですよ。

十里(声) え？

五朗(声) お母さんの。

一香(声) そうですけど。

五朗(声) でも、三日前、ですよ。

十里(声) え？

五朗(声) 誕生日。

十里(声) うん。

五朗(声) ちょっと待って下さい、(電気のスイッチを叩く)

明転。五朗、一段と浮かれたパーティー帽子を被り、タンバリンを持っている。

五朗以外、再びそれぞれ隠れている。(玄関ドアの方から見て隠れる。客席からは見えていて良い)

五朗 じゃ、まさか皆さん、三日間こうして…

十里 (隠れており) だっていつも夕方ここを掃除しに、

一香 (隠れており) でも全然来ないしずっと留守みたいだし。だから心当たりにもきいてみたんだけど、

五朗 (どこから一香の音が聞こえているのか分からぬまま) えっ三日間、姿が見えないんですか、

十里 (隠れたまま) うん。

五朗 じゃそれって、失踪とか蒸発とかそういうあれじゃ、

一香 (隠れたまま) いいから五朗さんも早く隠れて。

五朗 いや今日は俺、仕事でここに(手に持ったタンバリンに気づき) あっいつの間に…！

十里 (隠れたまま) オッケー千紘、電気消して。

五朗 (千紘を止めて) ちょっと待って。(一香に) いいんですかこんなことしてて、

十里 (隠れたまま) あ？

五朗 だって、

十里 (隠れたまま) ああ、いま代理で搜索願、出して来てもらっただし、

春奈 (顔を出してうなづく)

一香 (隠れたまま) ビラだって沢山、貼ったり配ったりしてもらいましたから。

夏希 (顔を出し、大きなビラを見せる。)「母を探しています!!」の文字の下で、一香と十里が叫んでいる写真

五朗 あ…。いやこれじゃ、

夏希 (ビラをしまつて隠れる)

一香 (隠れたまま) ちゃんと手は尽くしましたから。

十里 (隠れたまま) だから大丈夫。
五郎 いやでも、
十里 (隠れたまま) はい千紘、電気。
千紘 (歩くもふらつく)
五郎 (思わず) おい大丈夫か、
千紘 はなせよ、(と、小さくだが強く言い五郎を振り払うが、その後もふらつく)
一香 (あらあらと笑いつつ) ご馳走もケーキもジュースもみんな揃ってからねー。
五郎 え、何も食べてないんですか。
十里 (隠れたまま) もちろん。三日三晩ろくに食べてもないし寝てもいないよ。
五郎 (急ぎ自分の帽子等外しつつ) いやもうやめましよう、ね。つかお母さんこういうの、ちょっと嫌がってたし、
十里 ……は？ 喜んでました。だからこうして毎年毎年、(詰め寄るか、隠れたまま)
一香 ええ、喜んでました。いつも有難う有難うって、(詰め寄るか、隠れたまま)
五郎 そりゃ口ではそう言いますよ、でも去年こういうのはもう、ちょっとって、
十里 テキトー言わないで！ (五郎を突き飛ばすか、隠れたまま)

玄関に続くドアからスーパーのレジ袋が飛んでくる。五郎と千紘以外、顔を出してそれを注視。

五郎 (レジ袋を拾ってゴミ箱に向かいながら) いやいや、だからこんなこともうやめて…
一香 (レジ袋に向かって) サップライズ！
十里 (勢いで) フーウ！
五郎 え…？
千紘 (勢いでクラッカーを鳴らす)
夏希 (レジ袋に向かってステップを踏み始め)
春奈 (同じくスマホで撮影を始める)
一香 (目を細めてレジ袋に歩み寄りつつ) 母さん？ ああ母さん、大丈夫？ 心配したんだよ！
十里 (思わずレジ袋に駆け寄り) いったい何があったの？ ああ…どうしてこんな…
一香 まるでビニール袋じゃない…！ (思わず込みあげ泣き)
五郎 いやあの、
十里 ハッピーバースデイ母さん♪ハッピーバースデイ母さん♪ほら、(五郎にタンバリンを振るよう促す)
全員 ハッピーバースデー、ディア母さん(零奈さん)♪ ハッピーバースデー、トゥーユー♪
五郎 (そして「無事でよかった」など安堵の声を漏らし祝福の言葉をかける)
五郎 あ、あの…。
十里 (レジ袋を取ってパンツと伸ばし、まるめながら) さ。それじゃ始めよ。
夏希 じゃ私たちロールパイとキッシュとタルト、作ったんで持ってきますね。(玄関に続くドアから出ていく)
春奈 たくさんあるからたくさん食べてね。あ、五郎さんもよかったら、(同じく)
一香 そんな、気を使わせちゃって、
十里 あ、一香、私も。唐揚げ作ったから取ってくる。ほら千紘。(レジ袋をソファに放り、玄関に続くドアへ)
千紘 (小さく) ああ(玄関に続くドアへ)
一香 するい十里。私もカナッペ(と慌てて追うが)…あ。(レジ袋に) 母さんごめん、ちょっとここで待っててね。
五郎 あっあの。あのっ、
一香 (立ち止まる)
五郎 こないだお伝えしていたように、今から内見を、
一香 え？

五朗 ほらG号室の。今もう、いらしてるんで、
一番 ああ、そういうことは母に言っして下さい。もうずるいよ、と、玄関へ続くドアへ去って行く
五朗 あ、…はい。

五朗とレジ袋だけが残される。少しして茜、玄関に続くドアから顔を覗かせる。
茜は少々垢抜けない服装。一枚の書面を持ち、大きめの荷物を抱えている。

茜 あの、何かありました？皆さん…(振り返る)

五朗 ああすみません、何でも無いんです。あ、こちら万零奈さん、(レジ袋を示す)

茜 (見る)

五朗 カーサよるずの大家さんです。

茜 は？

五朗 こちらは住民の皆様のご共有ラウンジです。(パーティ帽子等を棚に置き)ここはほんとアットホームな物件なので安心ですよ。あ、零奈さんはA号室に住んでますね。(レジ袋に)じゃ、G号室、内見させて頂きます。(茜に)さ、行きましょ。

(玄関に続くドアへ)

茜 あ、はい…。(五朗に着いていく)

五朗 (ドアの外に出てドアを閉めたと思った瞬間にすぐさまドアを開け)はい、こちらがG号室です。どうぞ。

茜 えっあの、(と、促されるままに部屋に入るが)

五朗 はい？

茜 (思わず笑って)つかこ今この、

五朗 はい？

茜 つかあの、(レジ袋を見るなど)

五朗 ああ。こちらは、多次元物件となっております。

茜 は？

五朗 先程のラウンジに加え、一つの空間をA次元B次元C次元D次元と「多次元構造」にすることで、限られた空間を最大限以上に、活用していますね！。

茜 ……は？

五朗 で。今回ご紹介するのはこちらG次元の、G号室。

夏希 (玄関に続くドアからやって来る) ああもうほんと勘弁。△D号室▽

春奈 (同じく) ねえ、ちょっとだけ先食べちゃおうよ。△D号室▽

夏希 (台所の方へ向かう) △D号室▽

茜 (二人の声に驚き、二人を目で追う)

五朗 この北沢二丁目はいへん人気のエリアでほらもう駅からこの辺、凄かったでしょ、人。

夏希 (台所から) タルトでいい？それともキッシュ？

(玄関に続くドアからやって来て夏希の付近で) はっタルトだキッシュだってクソ洒落たもんばっか。△C号室▽

茜 (十里の声に驚く)

五朗 特にこの十番地はほんと、人口密度が凄いもんで。

茜 はあ…(三人を見ている)

五朗 で。この奥は洋間が2つと(奥のドアの向こう)、この奥が洗面所とトイレ(舞台奥)。で、向こうが台所になっておりまして(客席間スペース)、

夏希 (台所を探りながら) ねえどっちがいいのー？

千紘 (玄関へ続くドアから入って来て台所へ走る) もー腹減ったよ…△C号室▽

五朗 その向こうが勝手口です(劇場入り口)。

一香 (大きなため息をつきながら玄関に続くドアから入ってくる) ハB号室
五朗 そしてこちらはテラスでして(上手側客席)、
十里 (一香の目前で) あー一香の癖にカナッペとか笑えるわー(千紘に) あんたは唐揚げの方がいいよねー
夏希 あ。やだ、寝ちゃったの？(と戻って来る)
五朗 (舞台上を指し示す) こちらが、リビングになっておりますねー。
茜 (四人を見る)

春奈は寝たまま、一香と十里と夏希、それぞれソファに座る。間。
それぞれの方向を向きながら、ぎゅぎゅぎゅにソファに収まっており、しばしそのまま放心状態。

五朗 いやあこの辺でここまで広い物件はなかなか…

茜 (遮って) いや。でも居ます。

五朗 え？

茜 (四人を指差す)

五朗 ああ。(書類に目を落とし) 他の次元のことは、気にしないで下さい。見ないで下さい。

茜 ？

五朗 いずれ見えなくなりますから。見ないでいれば。

茜 (でも、と言っ間もなく)

千紘 (唐揚げを頬張り声をあげつつ、手にも唐揚げを持ち、勢い良く走って戻って来る)

五朗 で。A号室には大家さんの零奈さん。B号室にはその長女の一番さん。C号室には次女の十里さんと息子さん。あとD号室には(書類をめくって読む) あ、佐藤春奈さんと鈴木夏希さんのお二人が入居してまして。

茜 (確認していくように順に四人を見ていたが、ここから客席の方を、直視は出来ないものが見始める)

五朗 (続けて読んで) ああ留守がちですがE号室には秋野冬紀さんが。それから…

茜 あとあの、そっちにも居ますよね？ そっちと(下手側客席) あとそっちにも…(上手側客席)

五朗 え？ あー…(書類をめくる)

茜 (小声で) なんか皆さん並んで座って…あつ！あとその上にも！(ブースを見上げる)

ブース内が明るくなり、何か操作すると舞台上の灯りが小さく点滅。

五朗 (書類を見て) ああ！F号室は劇場になってますね。

茜 はい？

五朗 (書類を読む) 小劇場、らくえん？さんが入ってます。

茜 あ。(上手側客席の誰かと目が合い会釈など)

千紘、棚からワイヤレスヘッドホンを取って操作し音楽を聴き始める。(音響でその音が流れる)

五朗 (書類を閉じて) こちらの建物は築41年。ここに入って来る時にご覧になったと思いますが、この上も賃貸マンションになってまして。こちらの地下スペースは16年前の二十七年に、このようにリニューアルを。

茜 あっじゃあ上の！この上のマンションでお願いします！

千紘 (踊り出す)

五朗 え？

茜 上の部屋、どっか空いてないですか？

五朗 (書類をめくる) あー…

春奈 (唐突に体を起こし) あれっ！タルトは？
夏希 (驚き立って) あっぴびっくりした。だって寝てたから。
十里 (立って千紘に) ねえ。私にも唐揚げ持ってきてよ。
夏希 (歩き出す) ちょっと待ってて。

ここから四人やたらウロウロしつつ話す。茜はそれから逃げつつ五朗の返事を待つ。一香は一人、座ったまま。

十里 (歩きながら) とりあえず私たちの分だけでいいからさ。
春奈 (軽く運動しながら) 持ってくるのは今度でいいよねもう。
夏希 (台所に向かいながら) まあどうせご家族居るし？
十里 (歩きながら。一香の近くで) あっちはどうせ、一香が戻るから大丈夫。
春奈 (軽く運動しながら) だからとりあえず食べちゃお。食べて寝よ。
十里 (歩きながら) 食べたらあんたもちよっと寝な。
千紘 (踊りながら台所へ向かう) (※その後、劇場入口の衝立？の後ろか、見えない所へ、一旦去る)
十里 (これまでで一番茜に干渉しながら) あ、ねえ。母さん、すごい喜んだよね。喜んでたよね。ねえ！
茜 (四人から逃げながらか避けながら) あの、どんな部屋でもいいんで、
五朗 (書類を見たまま) あーあるにはあるんですけど、
茜 やった！

五朗 (書類を読み) えー半畳半畳半畳の2DKと、半畳半畳半畳の1Kですね。(若干音楽に乗せて)
茜 …は？
五朗 (書類を見て) あと半畳半畳半畳のワンルームと半畳半畳半畳半畳、半畳半畳半畳半畳…(音楽に乗せて)
千紘が見えなくなると、音楽小さくなっていく。

千紘が見えなくなると、音楽小さくなっていく。

茜 (見上げて) この上って、そんなんですか…？
五朗 はい。この辺をご希望でしたらもうここしか。どうします？
茜 ……。
五朗 こちらでしたら零奈さんに言えはすぐ。
茜 (ソファ上のレジ袋を見る)
五朗 大丈夫ですよ。慣れます。
茜 いや(舞台上の人々を見る)、だって(両客席を小さく指差す)、
一香 (棚の方へ。アルミを被せた皿を小皿を取りに行く)
夏希 (声を挙げながら、アルミを被せた大皿と酒瓶数本持って戻ってくる)
千紘 (声を挙げながら、アルミを被せた皿を持って戻る) (※音楽の音量、また大きくなる)
夏希 ! (二人から逃れて柱の向こうに隠れる)
茜 全部持って来ちゃった。
春奈 まじか。(「ちょっとそれ貸して」「それ持って」「つか持ってくる分は？」など手分けし始める)
十里 あーもうまた。油でビチョビチョじゃん。(千紘の皿を奪つ) ほんと誰に似たんだか。
千紘 ほら手、洗ってきて。(奥のドアのドアノブに手をかける)
十里 ……。(十里を見たまま洗面所のドアノブに手をかける)
千紘 なに。
一香 ……。(玄関に続くドアノブに手をかけ立ち尽くしている)
十里 なんだよ!

五朗 (姿の見えない茜に) …じゃ。決まりでよろしいですねー。(書類をまとめ始める)

茜 (慌てて出て来て) ああっすいません、ここはちょっと、

春奈 (手分けして皿と瓶を持ち終わり) よっしベッドで食べよ。(奥のドアへ、)

夏希 (同じく) いいね。(奥のドアへ、)

千紘 (反抗的な態度で洗面所へ去り、)

十里 ちゃんと手、洗うんだよ！(奥のドアに去り、)

一番 (皿を持ったまま玄関に続くドアへ去り、)

そうして三つのドアが同時に閉まる。音楽カットアウト。

するとドアで隠されていたカーテンの辺りの天井から、ぶら下がった女性の身体(零奈)が見える。

後ろ姿。肩より上は頂垂れており見えない。カーテンと似た色と柄の、カラフルなワンピース。

茜 ……………え。

五朗 (茜に) え？

茜 何？(零奈に近づいてみて見上げ、驚愕。悲鳴を上げる)……！

五朗 なんですか？

茜 あ…なんかごめんなさい失礼します…！(と劇場入り口に向かって全速力で走る。台所を通る)

爺さん (茜が近くに来た瞬間、台所のゴミ箱から勢いよく飛び出す) サプライズ！ ハラウんじく

茜 ……！

五朗 どうしました？

爺さん ……零奈？(パーティ帽子被っており、バスデーキーを掲げている)

茜 …あ、なんかお爺さんがバスデーキーを持って、零奈って、

五朗 え、確かここのお爺さんは四丁目に住んでますけど、

茜 でもゴミ箱から…！

五朗 (噴き出して) ああそんな。ゴミ箱に三日間も隠れてるわけないですから。

爺さん (完全に三日間隠れてたであろう感じで、フラフラと歩く)

茜 ……………。

五朗 じゃ私、ちょっと手続きして来ちゃいますね。(玄関に続くドアへ去っていく)

茜 あっ待って！(と、五朗を追って舞台上に戻るも吐き気がし、思わずレジ袋を手を取って、その中に嘔吐)

爺さん ……零奈？

茜 ……。(レジ袋を見る。そして何か声を漏らしつつ、レジ袋を指でつまんで持ったまま、玄関に続くドアから出ていく。荷物は舞台上に忘れぬ)

爺 ……どこだ？

音楽イン。爺さん、フラつきつつ舞台上に上がり、零奈を探す。

爺さんは玄関に続くドアから去っていく。照明、明るいまま映像イン。

音楽のタイミングで千紘、激しく壁を叩き始める。十里が奥のドアを開ける。

十里 なに？

千紘 (洗面所のドアを開け、リズムに乗って足踏みなど。ヘッドホンをしている)

十里 え？なに？トイレ？

千紘 (漏れそうなのか激しめに踊り、手を伸ばす)

十里 ああ紙？ はいはい。(と、奥のドアをスクリーン状態に開け、奥のドアへ去る)

FILM OPENING 思慮深度

千紘はそのドアの向こうに隠される。

照明オフして、タイトル。

サイエンス番組か放送大学で、ナレーションか教授が、淡々と喋る。図解付き。

「人間の思慮深さは、その人間の住む土地の面積によって変動します。

例えば面積「1」に対し人間「1人」であれば、その人間の思慮深度は「1」。(その図式)

面積「1」に対し人間「2人」であれば、その人間の思慮深度は「2分の1」に。(その、倍々図式)

更に面積「1」に対し人間「100」であれば、その人間の思慮深度は「100分の1」に。そして更に…(その、倍々図式)」

激しく稼働中の発電所。噴き出す煙。

密集地と過疎地。ざくろとざくろの種。

その多重的コラージュのち、千紘が洗面所ドアを開ける。

ご契約1 別人格1 (一香と零奈) ラウンジ/C号室

千紘、洗面所ドアを開けると同時にヘッドホン进行操作。C号室。音楽と映像、カットアウト。

千紘 紙まだ?!

同時に一香、皿と瓶用の可愛い袋に入ったシャンパンと、ゲロの入ったレジ袋を指でつまんで持ち、玄関に続くドアから入って来る。ラウンジ。

一香

(レジ袋に) ねえ母さん何があったの? 何であんな所に? ねえ! (辺りに) ちょっと十里、母さんが。十里? …春奈さん? 夏希さん? ……。(レジと皿と瓶をテーブルに置く。レジ袋はちょっと遠くに。そして見つめる。以降そのまま)

千紘 (壁を激しく叩く。或いは「あー…!」)

奥のドアからトイレトペーパーを持って十里がやって来る。C号室。

しかし全く同じ衣装と髪型だが、全くの別人(※配役も別人)。一香は座ったまま。

十里 あーごめんごめん、なんかちょっと寝ちゃった。

千紘 えっ誰??

十里 (千紘の様子に驚き、その真似っぽく) えっ何??

千紘 (その様子に) 誰だよ…!

十里 え? あー(自分の頭や顔や体を両手で触りながら) なんかちょっと寝癖ついちゃったかも。

千紘 寝癖??

十里 うん、なんかガクンて寝ちゃった(笑)

千紘 寝癖??

十里 ああ一香のやつラウンジに戻ったかな、パーティーしたかな。母さんもうA号室に戻ったかな。

千紘 寝癖…?

十里 つか、一香のやつカナッペって(笑)。どうせリッツにベビチーズ(乗っけて笑)、

千紘　そこに(こうやって笑)青のり(笑)青のり(を爆笑)で、いつものクソ不味いシヤンパンを\$%&#%&%(笑って何言ってるか分からない)
え？何？(怖い)：え？母さんなの？何なの？

玄関に続くドアから書類を持った五朗がやって来るが、こちらも全くの別人(※配役も別人)。
まったく同じ衣装だが、イメージは細身スーツに先が尖りめの靴の男。

五朗　失礼します、ああ一香さん(軽快に歩み寄りつつ)今のお客様、早速、契約ご希望で。あいやいや！僕はただ普通にご案内をしたまでで。ほんと。こちらがとても素晴らしい物件だからこそで。ねえ。(と、とびきりのエセ笑顔ののち、素の表情に)
一香　：え。五朗、さん？

五朗　(素のまま)あ：すいません。僕、ご契約時はいつもこんな感じで：よく人が変わったみたいだと言われます。
一香　あ、いえ変わってます…

五朗　(エセ笑顔で)だって売買も賃貸も人の人生左右する大きな契約じゃないですか。そのニーズにバシッと応えていつでも満足度120パーセントのご提案をあれしなきゃなんで。ねえ。(と、エセ笑顔のち即、素で深い溜息)

十里　(引き笑い止まらず、咳き込んだりしていたがやっと一息)はー。

五朗　(素のままレジ袋に)だから零奈さんこちらに印鑑。したらもう帰るんで…(と書類をテーブルに置き)

十里　(トイレットペーパーを千紘に差し出す)はいトイペ。

五朗　あ、零奈さんどうされたんですか？

一香　(棚からティッシュ箱を持ってきて)分からないんです、戻ったら外でこんな、(と手を拭く)

十里　なに？知らないの？トイペ。

千紘　なんだよ略すなよ！ババアの癖に、(とトイレットペーパーを奪い、洗面所へ戻ろうとするが)

十里　そっかそっかごめんごめん待って待って待って、(と、何か思い出し急ぎ玄関ドアへ一旦去る。ドア開けたまま)

五朗　じゃ代理でいいんでここにチャチャッと、(ポケットを探る)

一香　え、

五朗　それが拇印かサインでパパッと、(と、朱肉とペンを持って強引に一香の手を取る)

一香　いえそんなの私、

五朗　もう全然大丈夫なんで、(と、かなり強引に拇印を押させようとする。早く、書けよ、など色々言いつつ)

一香　あっちゃっ…やめてください、(と、揉み合い、書類と朱肉とペンを五朗に投げつけ、五朗も投げ返すなど。

ワヤワヤし、最後にティッシュ箱で五朗を思い切り叩く)やめてよ！

茜、後ろを振り返りつつ玄関に続くドアから急いで入り、自分の荷物を取りに行く。

一香　あ：ごめんなさい、私、そういうの駄目なんで。ちゃんと誰かに、やってもらわないと…

十里　(大きくて重いモチツとした白いものを持って戻ってきて、それを千紘に差し出す)はい。

千紘　(気持ち悪い)え？

茜　(引き返そうとしたものの、十里が戻って来て戻れず、小さくなる)

一香　(テーブル上の皿と瓶を見て)ほら今だって。ここに戻ってきたの私だけだから。きっと今頃皆んな、さっさと好きにやってくるだろうに、私は何をやらせても、グズだしダメだしズレてるから…。

千紘　なんだよそれ。

十里　レット・パー。

千紘　は？

十里　だから、それが「トイペ」でしょ？

一香　でも、母だけはいつも私の味方で…。(ソファに座り)

十里 で、これがその略された、「トイレット・ペーパー」の、ね？（指で空をなぞり）この：「レット・パー」。

千紘 は？
一香 いつも優しくして、何でも許してくれて…。（レジ袋を見る）

十里 ね。だからこれもちゃんと持ってた。（レット・パーを千紘に持たせる）

一香 なのにならいたいどうしちゃったの：そんな、酸っぱ臭い顔して：なんなの？！

千紘 …あ。じゃあ棒は？（嫌々受け取ったが、ふと思う）

十里 棒？

千紘 ほら一本足らないじゃん。「ペーパー」で二本だから「レット・パー」だと「ペー」の方の（指で空をなぞる）、

十里 あー：（ポケットなど探り出す）

一香 ……。じゃ。十里んとこ行こう。あいつにやらせよう。（立って）はいじゃ五朗さんも。それ持って一緒に、（と、書類を手にする）

茜 あっそれ…。（と、思わず呟き立ちあがろうとするも）

五朗 （ずっと一香を見ていたが）…あっこめんさい。僕、朱肉ですよ？（また別人格）

一香・茜 ？

五朗 ああほら。さっきあなたバーンして。（と、自分や落ちたティッシュ箱や朱肉やペンを指す）ね？

一香 …え？何？（入れ替わったの？）えっ？あっ、じゃあ（朱肉を拾って）…これが、五朗さん…、

五朗 いや色々こうバーンしたから：多分それがペンで、これが書類で…。あ、これがあなたかな？（書類を指す）

一香 私？！

十里 （色々と探してみたが）あーごめん、ちょっと待ってて。（玄関に続くドアへ）

千紘 （便意）ああもう駄目だ：（トイレとレットパーを投げ捨てて洗面所へ。ドアは閉める）

十里 （部屋から出たと思ったらすぐ入り）あ、一香、「ペー」の方の棒ってある？

一香 えっ何？誰？

十里 ああもうこれでいいや（と、ティッシュ箱を拾って引き返そうとするも）

一香 あっそれは、

十里 え？

一香 多分、五朗さん。

十里 …は？…。（ティッシュ箱を見てから、シュツ、シュツと一枚一枚、取っては捨てる）

一香 あ、あ。減るから。

十里 （やたら取っては捨てながら、玄関に続くドアへ去る）千紘、これ使いな。（ドアは開けたまま）

一香 （それを拾いながら）あ、五朗さん減っちゃうから、なくなっちゃうから、

十里 （すぐに玄関ドアから入って、洗面所パネルの上から箱を放り投げる）ほらよ！

一香 （ドア外に）あとそれ水に流れないから、もう…、話聞けよ！（玄関に続くドアを蹴って閉める）

十里 （トイレとレットパーを拾って）全部使いきっちゃっていいからねー（奥のドアに去り、ドア閉める）

五朗 （まだしゃがんで考えていて）…あれ。じゃあなた、何なんでしょう？

一香 なんでもいいよ！

一香 袋からワインの瓶を出し、栓を抜く。

茜 茜は落ちた書類を急ぎ拾い、荷物を持って、玄関ドアと劇場入り口のどっちに行こうかと迷う。

一香 はその後、ワインをラッパ飲んで飲み始める。

ご契約2

発電 一（茜と董・春奈と夏希）

ラウンジ／C号室／D号室

茜 （やっぱり劇場入り口から出ようと、そちらに向かって急ぎ歩き出す）

五朗 （※改め朱肉）なに？ 学生さん？

茜 えっ

朱肉 この辺で物件探してんでしょ？ 学生さん？

茜 え、いや。つか：（周りを見回すなど）あれ？

朱肉 ああ自分もほら今さっき、駅の向こうのきくや文具店で。だからこのなんか色々は、ちよっと、全然。

茜 ああ：（色々と腑に落ちないまま）

朱肉 つかさ（振り返ってぶら下がった零奈を見る）なんなのあれ。：キモ。

茜 …。

朱肉 ここは無でしょう。あり得ない（笑）

茜 はい。

朱肉 なんかさっきからこだけ明る過ぎるし（ブースに）あっすいません、ちよっと眩しいんですけど。（茜に）あっついよね、なんか。

舞台上、ドラマチックに暗くなる。

朱肉 あ、なに？ちよっと暗すぎ（笑）なんかもっとう、普通に。普通の、ねえ（とブースに言いつつ柵へ）

舞台上、普通の照明に。一旦、客電も明るく。

朱肉 ああありがとうございます。（柵にいくつか置いてあつた小さいペットボトルの水を一つ取り、茜に）いる？

茜 あ、いえ。

朱肉 （客の誰かに）いります？（断られるか一本渡す。以降、開けて飲みつつ）え、学生さんじゃなかったら、なんでこの辺？ほら世田谷がダントツだって、人口。（客に）ねえ。増え続けて。（ソファに座る）

十里 …？（朱肉が話しかけている方を見るなど）

朱肉 全体的には減ってんでしょ？日本の人口。（客の誰かに）ねえ。（茜に）なのになんで？

十里 え、誰と話してんの？

朱肉 え？あー：（茜等が見えていない様子の十里が面倒臭くて）独り言？

十里 ？（酒を見て、ラッパ飲み）

朱肉 で？実家は？どこなん？（茜をソファへ促す）

茜 あー：、青森です：（ソファに座る）

朱肉 へー！いいね。広大な土地に、雄大な海と山だー。

茜 ええ、広いですよーすごく。

トイレを流す音から、音楽イン。千紘、晴れやかな顔でヘッドホンした状態で、空になったティッシュ箱を持ち、洗面所ドアから出てくる。C号室。※照明はこの後少しずつ、客席を暗くして舞台上のみに。

千紘 （奥のドア向こうに箱を投げながら）全部使い切ったよ！（そして手の匂いを嗅ぎ、ズボンで拭く）

朱肉 うわ。あいつ手、洗ってねえよ絶対。

千紘 （リズムに乗りつつ十里の上に座る）

朱肉 （それを見て）ほら変だよここ。それぞれ別の部屋だったってこんな。青森いいじゃん、そっちの方が。青森のどこよ。

茜 六ヶ所村です。

朱肉 ろっかしよむら？

茜 はい、実家は代々続く老舗の発電所で、代々みんなエンジニアです。

朱肉 え？

茜 でも父も母も叔父も叔母も、再処理工場の事故で。私がまだ小さいときに。
朱肉 あー。

茜 なので祖母が私を育ててくれました。火力・風力・ソーラー・原子力の、全ての発電所を、たった一人で切り盛りしながら。
朱肉 え、一人で？

茜 だってみーんな出てっちゃいますからね。毎日ひたすら核分裂を繰り返すだけの、退屈な生活なんて。

朱肉 あー！

茜 あっ昔は余った電気を担いで行商なんかも。

朱肉 え？

茜 ほらほっかむりして、こういうの担いで。ダサ(笑)

朱肉 いやちよっと待って、

奥のドアから春奈と夏希、喋りながらやって来る。春奈は枕を持っている。D号室。

夏希 あー、寝たらスッキリしたねー。

春奈 夏希寝たの一瞬じゃん。寝たと思ったらもう起きてたよ。

夏希 そ？

春奈 もうほんっと一瞬だったよ。(と、ソファに寝そべりにくる)

茜・朱肉 (慌ててソファから逃げる)

春奈 あーもー眠い。

夏希 え？眠れないの？

春奈 もうダメだ。(ソファで寝ようとする)

夏希 大丈夫？タンパク質足りてる？生ハム食べる？(春奈にやたらとまとわりついて)

春奈 ごめんちよっと寝かせて、退いて(夏希を押し退ける)

夏希 えっ、ごめんごめん。あ。じゃさ、ちよっと仕事してくるよ、だから寝てて。ね？(奥のドアへ向かう)

春奈 ああありがとう。(心底ほっとする)

朱肉 ほらね。生活リズムってのも人それぞれだし、こんなに人が居たんじゃ全然、落ち着か(ない)

夏希がドアを閉めるとカタカタとPCキーボードを高速で打つ音が聞こえ、

聞こえたと思ったら即、ターン！と打ち終わる音がしてすぐ奥のドアから戻ってくる。

夏希 あー終わったノルマ全部終わったー。

春奈 早過ぎー。

夏希 今週分全部やっちゃったーもー疲れたよー肩揉んでー(春奈にやたらとまとわりつく)

朱肉 うわあーうぜえ。

春奈 (夏希の肩を揉みつつ) ああもういや…

夏希 えっごめんね、じゃさ、ちよっと走ってくるからさ、ね？(と柵からタオルを取って劇場出入口口に走っていく)

春奈 ああ、ありがとう。(心底ほっとする)

朱肉 …うん。こんなとこやめた方がいいね。帰んなよ。

茜 でも、寂しいですよ。六ヶ所村どころか関東以北には、もう祖母一人しか住んでないんで。

朱肉 え。

茜 北海道・青森・岩手・秋田、

朱肉 宮城・山形・福島・新潟…？

茜 はい。その関東以北に、祖母がたった一人しか居ません。

朱肉 嘘でしょ？！

十里 ボンバイエ、ボンバイエ：（酔っ払っている。ウロウロします）

朱肉 他の人たちどうしたの。まさか皆んなこっちに？

茜 （十里を見ながら）ええもちろん。

十里 （受け口で）猪木ですかっ！

朱肉 （十里に）うるせえよ！

十里 あー……。 （更に飲む）

千紘 （また十里の上に乗るか寝転ぶなど）

朱肉 （十里と千紘を見て）だからこっちは、こんなことに……。

夏希 （飲み干したスポーツ飲料のペットボトルとタオルとお土産を持って、全身ビシヨビシヨの状態に戻って来る）あー走った

走ったー！さっきはごめんね。寝れた？（走って一気に舞台上まで戻り）

春奈 あー……。

夏希 笹塚まで行ってから三茶までぐるーっと回ってきたよ。はいフロランタン。並んだ並んだ。（春奈のもとに）

春奈 ……あーはいはい、ありがとう。

夏希 春奈のために並んだんだよ。好きでしょ？これ。（水滴を春奈に撒き散らすなど）

春奈 冷たっ！冷たっ！（など）

茜 あー。賑やかだ。活気がある。やっぱいいな……。

朱肉 え？

春奈 （起き上がり）じゃ映画見よっか、前から見たがってたやつ。配信きてたでしょ。

夏希 お。いいね！見よう見よう。（スマホを取り出す）

茜 え、なにになに？（移動）

朱肉 あ。ちよっと、（追って移動）

夏希、スマホを操作。派手な映画風音響ほんの一瞬。すぐ終わる。

夏希 （号泣している）はーやっぱ良かったー感動したー哲学的だー

茜 （号泣しており）どんでん返しが最っ高だ……！

朱肉 え、なに？全然わかんなかった。

春奈 （寝ようとしたが眠れず）何倍速で見たの。

茜 だから私、戻りませんから。あんなクツソ寂しいとこ。

夏希 （春奈にくっつき）ねえねえ凄い良かったね。特に○○が○○したとこなんか、

春奈 もういい加減にして！ウザいんだよ！

十里 3、2、1、ダァ。3、2、1、ダァ。（酔っ払っている。拳を下に振り下ろす）

千紘 （ちようどその下に居て、十里に頭を殴られながら）あ、痛っ。あ、痛っ。なに？

春奈 もう放っておいて。（奥のドアへ去っていく）

夏希 え、なんで怒ってんの？ごめんて、ごめんて、（春奈を追って奥のドアへ去る）

千紘 なんだよ、母さん、頭痛薬……。 （奥のドアへ去る）

朱肉 （3人が去るのを見送って）いや、やめといた方がいいって。向こうだってお婆さん一人きりじゃあれでしょ、

茜 ああこないだ新しいシステム開発したみたいで。世界初のマイク口派による長距離送電に成功して、

衛星を使って送電してるんで、その辺は。（カナッペの皿を朱肉に渡す）

朱肉 ……え？

茜 だから今、ほぼ全国の電力供給を、祖母が。（その皿の上にレジ袋を置く）

朱肉 一人で？

茜 だから、この電気も。(上を指す)

朱肉 あ。(照明を見る)

茜 だから大丈夫です。(と、書類を改めて机の上に置く)

朱肉 (茜が書類を広げるので思わずワインの袋を取って) …じゃあ…ここに住むの？

茜 …。ここしかないなら。(そして十里に近づくと)

朱肉 まあ…いいけどさ。そうしたいなら。(ぶら下がった零奈を見上げる)

茜 (十里を掴み持ってきて、書類への記入を試みる)

十里 (掴まれ、試まねながら) えっ何? …あ。私ペン? あ。私ペンか。

朱肉 (レジ袋を棚に置き) でも帰って来いって言われたいの? そうは言ってもお婆さん一人じゃ大変でしょ。

茜 (うまく書けず諦め、十里を放り出す)

朱肉 それより帰っ(茜が親指を押し付ける) お婆さんを助(親指) 助け(親指) 助(親指) ちよっと!(親指)

そうこうしていると、唐突に劇場全体が一瞬明るくなってから、照明暗くなる。

茜 …。あつ。(照明を見上げ) クッソまさか…(親指を朱肉に更に連打し始める)

十里 …。(放り投げられ倒れていたが、一念発起し書類に突進。記入を試みる) うおおおおお…!

すると唐突に暗転。少し間のあと。

茜(声) ああもう。婆ちゃん…!

そして金属破裂音と、水の噴き出す音。

朱肉(声) あっ何これ?

暗転のまま、しばし水の流れる大きな音と金属音等がする。転換。

入居日 1 溶けカス・漏電一(五朗と千紘) C号室/D号室

キューで水の音、静まっていき明転。全てのドアが閉まった状態。ゲロ入りレジ袋は上手棚の上に。

ヘッドホンを首に掛けた千紘がチートスを食べながら、部屋の端に小さく座っている。

そこに配管工と五朗が(※本来の)、洗面所ドアからやって来る。C号室。

配管工 はい、これで大丈夫です。(工具を手に、マリオ風衣装がいたって普通に)

五朗 ありがとうございます…。(上着はなく、シャツが乱れているなど)

配管工 ダメですよ、あなた水に流れないんだから。もう、このビル全体の下水管がおかしくなりましたからね。

五朗 すいませんでした…。

配管工 まあ、少しは溶けますけどね。溶けたでしょ?

五朗 え…? ああ、はい…。

配管工 でも話まりますから。詰まったでしょ?

五朗 はい。

配管工 だから気をつけて。

五朗 あ、はい。

配管工 じゃ一応これで。(玄関に続くドアに去っていく)

五朗 ああ：ありがとうございます。

配管工 (去り際に少しだけジャンプ)

春奈 (配管工を見送りつつ、そのドアから本を手にとって来る) あ、こんにちわー。デジャブです。

千紘 あ。

春奈 突然本っ当にごめんなさい。自分の部屋だとしても落ち着けなくって。

千紘 あれ？そう言って昨日も：あ、一昨日も？

春奈 ううん、デジャブだよ。(と、ずかずかと部屋に入ってくる)

夏希、奥の部屋からキョロキョロしつつやって来て、ソファで一人、スマホをいじり始める。D号室。

春奈 (夏希の横にびったり座り) はー、やっぱ落ち着くわー(五朗に) あ。やっと直ったんですね？大丈夫でした？

五朗 …ああ、まあ。何とか。

春奈 三日ぶりですよ？あー良かった、ちゃんと汲み出されて。(うふふと笑い) …でも五朗さん、下水管の中だったとはいえ、
 久々だったんじゃないですか？しばらくの間、同じ家で、親子一緒に、過ごせたのって。

千紘 ちゃん、…：良かったね。(そして本を読もうとするが)

千紘 (唐突に立ち上がり) うっせー女！黙れ女！売女雌豚クソビッチ！(唾を吐きかける)

春奈 …え？何？ちよっと、

千紘 あああ立つな女！座るな女！歩くな女！どこ行くん女女！

春奈 洗面所だよ、

千紘 そこだよ女！そのドアだよ女！

春奈 分かってるよーうるさいな！

千紘 だって女は方向感覚がないんだろ？空間認識能力がないんだろ？右脳が、脳がないんだろ？あとチン、ヤ、

五朗 おい、

千紘 チンコも精巣も、内臓も心臓も、なーんにもないんでしょ？なーんにも…：あつ居ない。ああつ、居ない！(唐突に春奈を見失って右往左往する) あああ、春奈さーん：春奈さーん…！

五朗 おい、どしたどした、(千紘を止める)

千紘 ああああいないい：いないんだよ…ああああ…いない…

春奈 …いや居るよ。ねえ。ちよっと。居るってば。(と、優しく千紘に触れる)

千紘 (再び唐突に) うっせー女！触んな女！売女雌豚クソビッチ！(再び唾を吐きかけ)

五朗 おい！(千紘の頬を思い切り引く叩く)

千紘 !

五朗 なんなんだ、大丈夫か？

千紘 ……………(声無く泣き出し) 別にオレ、そんなつもりじゃ、なかったんだよ、

五朗 ん？

千紘 ごめん父さん：流しちゃって。詰ませちゃって。オレ…

五朗 ああ、それはいいんだよ、別に、

千紘 違うんだよ、わざとじゃないよ…だって母さんが、母さんが、

音声 Bluetooth connected

千紘 (上品な中年女性となり笑いながら) ああ丁度いい塩梅にお味をまぶしてからになさって。

音声 Disconnected

五朗 お前、今、何と同期した？

夏希 (背後で熱心にスマホを弄っている)

千紘 (元に戻り) 母さんが、あのアマが、あのズベタが、あのインバイが、(泣いて五朗にしがみつく)

五郎 ああどしたどした：父さんはいつもお前の味方だよ、な？ …だからほら、うん、いつでも連絡しろ、な、洗面所ドアから五郎と同じような、しかし更にヨレツとした衣装の男、顔を出す。姿勢等もヨレツと。

カス …あ、そんな(笑) そんな事言っちゃって、

五郎 (驚き) なんだお前、

カス あ、すいませんどうも。(春奈に会釈)

五郎 え、

カス あ、溶けカスです。(五郎に会釈)

五郎 あ。

カス (千紘に) いやほら忙しいからさ、連絡されたところだね(笑) …つか。お前さえ居なかりやね、時間も金ももっと自由になるだけさ。

五郎 (驚き) 何言ってるんだ。(千紘に) いやいやいや、お前がいるから父さん頑張れるんだから、

カス (千紘に) いやいやいや、お前そもそも計画外。俺もあいつもそんな気全然。

五郎 あ。

カス 受精神からして迷惑千万(笑) だからイライラしかないのよ。ほらだから俺、あんまし来ないでしょ？ね？ あいつもそんな態度でしょ？(笑) しょうがないよねー、人の人生奪っちゃってんだもん。時間も気力も…あ、何その顔。今も絶賛奪い中？(笑) でもお前育てた金だけは、いずれきっちり返してくれよ？そのためだけに、味方してやってんだからさ。な？

千紘・春奈 ……………。(千紘は驚愕の顔で、春奈は嫌悪と非難の顔で、五郎を見ている)

五郎 (そんな二人に) いやいやいや！俺、1ミリも、そんなこと思って…

カス (真っ直ぐに五郎を見る)

五郎 (見られて息が止まり、なんとも言えない声が漏れる)

玄関に続くドアが開く。大手リフォーム会社の中年男性作業員、やって来る。

内装と電気工事の両方を請け負って違和感のない作業服。ドアは開けたまま。

作業員 失礼します、脊髓ハウスリノベーションです。あ、すみません。大家さんと連絡がつかなかったもので。

五郎 あ、

作業員 先日こちらで電圧に異常が生じたとのことで。その確認を。

五郎 ああ有難うございます(カスを掴んで千紘に) おいこいつ流すぞ、手伝え、

カス (するりと逃げて玄関に続くドアに走る)

五郎 あっどこへ、

カス …まあ、頑張れよ。(と千紘に言つと奇声を上げ、躍るように意気揚々と玄関に続くドアへ走り去っていく)

五郎 …！(思わず凄い勢いで追い掛ける。が、何とかギリギリ踏み留まる) ……………。

作業員 どうしました？

五郎 いえ…(そしてなんとなく千紘を見ると、千紘の頭か肩をぼんぼんっと叩く)

春奈 …じゃ私、戻りますね。(玄関ドアに去っていく。ドアは閉める)

作業員 (春奈を見送りつつ) あー外の配電盤に異常はなかったの。ブレーカーと分電盤のチェックを。

五郎 あ、はい。お願いします。

作業員 (部屋に入りつつ) 最近、電気系統に何か問題は。

五郎 あー…すみません、俺はここには、たまにしか。(千紘に) おいどうだ。何かあったか。

千紘 ……。(再びチートスを食べ始める。むさぼり食う)

五郎 ああ、なんかすみません(笑) いつもこんな感じみたいで。

作業員 (笑って) ああ。ウチにも同じくらいの年のがいますから、わかります。(と、工具箱から検査機を出し) じゃブレーカーから。

五郎 あ、はい。(舞台奥のカーテンを少しめくる。そこにブレーカーがある)

同時に春奈、玄関に続くドアから入る。D号室。夏希、立ち上がり一気に喋りだす。作業員はブレーカーの検査を。

夏希 ああどこ行つてたのもう心配したんだよお、ねえライン見た?

春奈 え?(スマホを見る) あっ!通知五万件??

夏希 うん、あと今あんた居ない間に書いたポエムが、貰取って今世紀最大のベストセラーになって、社会現象起こしてるよ。ほら。(スマホを見せる) 「春奈、我が人生」。

春奈 えっなにそれ?(自分のスマホを確認しながら、逃げるように奥のドアへ去る)

夏希 (スマホを見ながら春奈を追つて) あっ、今度〇〇主演で映画化もするってさー。ほら。春奈ちゃん♪春奈ちゃん♪
春奈ちゃん♪(テーマ曲らしき歌を口ずさみながら奥ドアへ。ドア閉める)

作業員 (検査をしながら、歌の続きを口ずさむ) ああハルナちゃん♪一人ぼっちだよー♪…ん? おかしいな。…あれ?

千紘 (うるさいなと、ヘッドホンをする。ほんの小さく音楽イン)

五郎 どうしました?

作業員 いや、…どこかで漏電してますね。あ、微量ですが。どこかがショートしてます。

五郎 え、

作業員 (千紘に) おい。(千紘の肩を叩き) おい君。そこを押さえておいてくれ。

千紘 …。(仕方なくカーテンを押さえる。ヘッドホンはしたまま。音楽は流れたまま)

作業員 ありがとう助かる。…さあどこだ?(ブレーカーから辿つて、柱の方へ) …お、この傷は。

五郎 あ、それは俺が、

作業員 ああ、君(千紘)の身長か! おお凄い。こんなに小さかったんだな。うん(柱の小さな傷を読み) 四歳五歳…、

六歳…

二人 ……

作業員 (柱を見たまま) …君はこの家が好きか。君の育った家だ。

五郎 (千紘を見る)

作業員 だからせめて、この家を大事にしよう。な。(そして検査を続けて) …ああ。(洗面所横を見上げて)

そこだな。…そこに何か、負荷がかかっている。(零奈のぶら下がった、天井を指す)

五郎 …そこに?(零奈の辺りを見上げて) え…。でも何が…、

作業員 分かりません。しかし微量の漏電であっても、何らかの拍子に発火の恐れがあります。(スマホを取り出し通話) あー応援を

頼む。(千紘に) ほら感じないか?この辺だ。意識を研ぎ澄ませてみる、ピリピリと来ないか?

千紘 (仕方なくヘッドホンを外し、音楽オフ。見上げ、感じようとする)

作業員 普段は気づかないほどの電気でも人体への影響はある。心臓の律動異常や呼吸器系の乱れ、それらから来る疲労の蓄積…

五郎 ああ(千紘に) 人間は筋肉や心肺機能を動かすために、脳細胞から電気的な信号を出してるんだよ。

作業員 そこに別の信号が与えられてじわじわと…

千紘 あっ! (ピリピリを感じた)

作業員 お!感じたか、凄いで。そいつが皆んなを混乱させ、イライラさせているのかもしれないよ。

千紘 えっ…

作業員 でも、もう大丈夫。ただちに原因を説明しよう。

千紘 (五郎を見る)

作業員 (千紘に) そこはもういい、工具箱を取ってくれ。

千紘 オッケー!(意気揚々と従つてヘッドホン操作。威勢の良い音楽イン。工具箱を取る) あっ重い…

五朗 おう頑張れ！
千紘 (なんとか工具箱を作業員に渡す)
作業員 おう重かったら！よくやったな。(千紘の頭を撫で、五朗に)では分電盤を確認します。
五朗 (千紘に)洗面台の棚の下だ！
作業員 じゃ、二人で一緒に準備を！
千紘 オッケー！

楽しげに洗面所に向かう五朗と千紘。部下、玄関に続くドアからやって来る。

部下 到着しました！

作業員 よっし！

五朗 (洗面所のドアノブを捻って) あっなんだこれ、…すごいぬるぬるしてんぞ。

部下 (素早くドアの元へ走りノブを確認し手の匂いを嗅ぐなど) ああ油ですね…唐揚げの…？

五朗 (笑って)なんだよ。おいお前だろ、ドアノブがこれ、ちょっと臭いぞ(笑)まさかお前トイレの後も、

作業員、ちようど先ほどの完全場所を通り、ビリビリッと感電する。

部屋が点滅し、劇的に暗くなる。

作業員 (突然の憤怒) ああああウンコションベンの手でチートスか！このスカトロ野郎が！(千紘が吹き飛ぶくらいの勢いで殴り

飛ばすか蹴り飛ばす。同時に音楽が地獄のような音楽に変わる)

五朗 …！(声出す)

えっ…？！(思わずヘッドホンを外すも音楽は止まらず)

部下 (洗面所のドアノブに駆け寄り) …ノブ、ああノブ、こんなになって…(涙ながらにウエスでノブを必死に拭き始める)

作業員 (洗面所にドアノブに駆け寄り) 大丈夫か?! あああ酷い…！しっかりしろ！ノブ…

部下 (ハツとし奥のドアに駆け寄りドアノブに) あああ…サブ…、サブ、サブ！お前もこんなに、汚されて…

作業員 (そして玄関に続くドアに向かって振り返り) ボブ？ …。ポーッ！(そして駆け寄り、そのノブに) あああ…！…

アイムソーリーボブ！ ソーリーボブ…：ボブ…：

部下 ああああ…：…(悔し泣き、地面を叩く)

作業員 皆、この家のドアの、開閉のために…

五朗 (改めてドア3枚を見てから) あ。国に家族を残して？

作業員 (千紘に)お前は どうして、ちゃんと手を、洗わなかったんだ…。

千紘 ……。

作業員 ……。地獄に堕ちる。

作業員と部下、素早く3つのドアノブを外す。部屋の灯りが揺れ、ビリビリと電気音が大きくなる。

五朗 え？ちよっと、何してるんですか、

作業員・部下 (3つのドアノブを大事そうに抱え、玄関に続くドアへ走り去っていく)

五朗 あの、ちよっと！それ、持ってっちゃうんですか？！ちよっと、(追って去る)

千紘 (どひびめえず、五朗を追って去る。ドアは開けたまま)

千紘が去ると、音楽はフェードアウト。

洗面所ドアのみ閉まり、他は半開きのまま、不安定な照明と、ジリジリとした電気音が残った状態。

一香がポストンバックを、その後ろを茜が前出の荷物を持ち、玄関に続くドアから入って来る。G号室。

茜 ありがとうございます、すみません。

一香 いえいえ大丈夫。無事に契約済んで良かった。はい、ここがG号室。(と、荷物を下ろし)つか荷物これだけ？

茜 あ、はい。色々全部、こっちで揃えていきます。ちよっとづつ。

部屋の電気、パキッと正常に戻る。電気音も消える。

一香 (電気直ったなと思いつつ)まあ、分からないことあったら聞いて。この辺の店とか。

茜 (電気直ったなと思いつつ)あ、はい。ありがとうございます。

一香 知り合いとか、友達いるの？こっちに。

茜 あー：

一香 ううん別にほら、こんだけ広いし。いいんだけど。呼んだり泊まったり。あんまり騒いだりしなければ。

茜 ああ居ないんで。それもこれから、ちよっとづつ。

一香 あ、そう。

茜 色々全部、これからです。

一香 あ、そう。

茜 はい。

一香 あ。部屋のこととかは母に。ラウンジの、棚の上に居るから。こっちの。(と棚の方を指す)

茜 あ、はい：(棚の上のレジ袋を見る)

一香 なんか最近はずいぶん無口だけど、喜んでるよ。人が好きだね。寂しいのが嫌いで。だから誰に対しても、明るくて優しくして世話好きで。

客席出入口から初老の男、こそっとやって来る。茜にだけ見える。

一香 こんな物件作っちゃったんだもん。そりゃね。

茜 (初老男を見ている)

一香 だから、安心して。あ、寝室なんかはそっちね。じゃ。(と玄関に続くドアへ)

初老男 (舞台上に上がり二人を凝視)

茜 あっあの、(早く奥の部屋に行きたいが行けず)

一香 ん？

茜 次元？つか部屋は、このG号室まで、なんですよ？

一香 そうだけど…、どしたの。

茜 あー：(この男は一香には見えていないかと確信しつつ)なんか知らない人とか、入って来ちゃう事とかないんですか、この…

初老男 (ふと気づき零奈を見上げる)

一香 (笑って)あーないない、そんなの一度もあつたことないよ。じゃ。(と玄関に続くドアに戻ろうとするが)

茜 あっちよっとお茶でもしてきませんか？その、オオセキでさっき買ったお茶ですけど、色々お話を聞きたいし、

一香 え、

茜 (必死に男を見ないようにしつつ)あー一香さんはお仕事は、何をされてるんですか？(鞆の中を探しつつ)どこにお勤め？

一香 ああ私は、ほら。ここで色々、母の手伝いとか。物件管理って、色々あるから。一人じゃ手が回らないから。

茜 へえ、(なかなかお茶っ葉見つからず)じゃこれまで特になんにも？

一香 あーうん、ほら昔美大でテキスタイルやって、ちょっとデザインの仕事やって、後はその事務なんかも、

初老男 (熱心に話を聞いている)

茜 へーデザインなんて凄いい！カッコいい。

初老男 カッコいい！

茜 (驚き思わず初老男を見る)

初老男 (鞆から何から取り出し始める)

一香 ぜんぜんだよ。大変で。なんかつままなくなってる。やめちゃって。で。父が出てっからはもう、…この手伝いだけ。また就職とか、別に出来ただけだよ。

初老男 (蛍光色の法被を着る)

一香 だからほら：友達も居ないし出来ないし、この先出来る見込みもないよ。ずっと一人だよ。

初老男 (ペンライトを取り出し、振っている)

茜 (男の様相から) ……あーでも。：ファンは、居ますよ？

一香 え？

茜 友達も居なくても、ファンは。

一香 ……え？

初老男 イッチー！

茜 イッチーさんの。

一香 え？何？

初老男 (一香を応援するダンスなど。古い)

茜 (その様子を観察しながら) ああ多分、…結構前から。多分、十、二十…？あ、三十年、くらい前から…？

初老男 (茜に対し激しくつなずく)

一香 え？なにそれ、なんで？ え？どこで？ 誰が？

茜 それは、わかりませんが。でも居るんです。だから、一人じゃないです。あと、応援されています。すごく。

初老男 (応援する)

一香 ……あ、そう。

茜 だから元気出して下さい。

一香 (この子気持ち悪いなと思いつつ) ……ああ、ありがとう。…嬉しいよ。

初老男 ……(感激。そして感涙)

茜 あ…お茶、ごめんなさい。なんかなくて。

一香 ああいいいい、ありがと。

初老男 (満足そうに汗を拭いて、一人幸せ噛み締め、玄関に続くドアに帰っていく。ドアは開けたまま)

茜 (初老男から目が離せず) ……。

一香 (茜の様子に首を傾げたまま) あ。…じゃ、また。(玄関に続くドアへ去っていく)

茜 あ、はい。ありがとうございました。…。(二人が去ると、さっき出した物を急いで鞆に仕舞い、奥のドアへ向かう)

奥のドアから派手な部屋着の老夫婦(マナティとジュゴン)、やって来る。

マナティ(女) は頭にカラーを巻き、ジュゴン(男) は腹巻きで缶ビールを持っている。

マナ ああ何？さっきからさっきまでね。

ゴン ああなんだ、知らない顔だ。

マナ 何の用だい、あんた誰だい。

茜 えっ、

一香 えっ、どうしたの？(と、急ぎ戻って来る)え、何？誰？

茜 (思わず一香の後ろに隠れる)

一香 (老夫婦に)何なんですか、出てって下さい。

マナ あ？

一香 えっ。(部屋ですっかりくつろぎ、耳かきや足の爪を切るなど始めた二人の様子を見て)……もしかして、ここに住んでます？…えっ、いつの間に？

ゴン なんだよ。

マナ 押し売りなら帰んな。何も買わないよ(ソファへ)

ゴン あ。ついでになんかツマミ(台所へ)

一香 (二人に)あ、あの、すみません、

マナ・ゴン(立ち止まり一香を見る)

一香 ってか、…どなたですか。

マナ・ゴン(…は？の間の後、唐突に大爆笑)

マナ うっ。うっ。嘘だろ。

ゴン くっ。くっ。苦しい。

一香 え、何ですか、

マナ あんたいたいどこの子だ。

一香 え、このの、

ゴン え、どこの？

一香 だから、この者です。

マナ (また大爆笑) いやいやいや待て待て待て、

ゴン (また大爆笑) ところでそりゃあモグリ過ぎよお、

マナ ほら、マナちゃんだよ。(何かポーズ)

ゴン ほら、ゴンちゃんだよ。(何かポーズ)

一香 え？

マナ え？ じゃないよ。はー。びっくり。

ゴン まさかあんたほんとに、このマナティジュゴン知らないのか。

マナ ほら「神秘の海」だよ。

ゴン 人魚の正体明かしたの…♪

マナ・ゴン 誰なんだい！

ゴン いったい♪

マナ・ゴン 誰なんだい！

一香 ……あ、芸人さん、

マナ・ゴン(大爆笑)

一香 あ、歌手の方、

マナ・ゴン(更に大爆笑)

一香 (考えて)…あーマジシャンの、

マナ 別に何でもないよ。ただのマナティ&ジュゴンだよ。はー。変な子だ。(と、ソファに座りタバコを啜る)

ゴン (スマホ着信したらしく電話を受け) ああどした、あ？(と、床に寝そべる)

マナ ……で？何の用なの。(と、タバコに火をつけようとするが、ライターつかず)

一香 え？あ、あの、

ゴン (マナに)おい！今、セイウッチャン、レデーゼーンで飲んでるって(スマホに)ああそんで？

一香 今日からここに、この…(と茜を指す)
 マナ え？なに？(ライターはずっとつかない)
 ゴン (マナに) おい行くかー？
 マナ 行かないよ！(次のゴンの台詞と重ねて) 今日には行かないってさっき言ったのにもう、何も聞いてないから。
 ゴン (前のマナの台詞に重ねて) ああ行かないって。気まぐれなんだよ。うん。なんも予定なんかないないない。
 一香 (勇気を出して) あ、あのっ！勝手に困るんです、今すぐ出てって下さい！
 マナ ……なんで。
 ゴン ……どして。
 一香 今日からこの部屋に入居するんです。
 マナ この部屋に？
 一香 だから、このカーサ万のG号室に、
 マナ は？ よろず？(なんとなく周りを見回し、考え始める)
 一香 はい、万です。カーサ万。
 ゴン でも、あたしらここに五十年は住んでるよ？
 一香 ……えっ。 あ、でもこの建物、築四十一年、
 マナ あー…！ほらなんだっけ。あれあれあれなんだっけ(ゴんに) ヨロズってほら。居たじゃんほら。
 ゴン あー…？
 マナ (思い出して) ヤオちゃん！ヨロズの！ レナウンちゃん！
 ゴン あー…！(歌のリズムで) お洒落でシックな？(腕だけ踊って) ワンサカワンサ、ワンサカワンサ？
 マナ そうそう(一香に) そのワンサカちゃんがどしたの、遂にワンサカしたの？
 一香 ……え？なんですかそれ。あ。レナウンって零奈…、母の、ことですか？
 ゴン いっ…？(そしてもう一回一香を見て) いいいっ…？！
 マナ 嘘だろおおお？(そしてもう一回一香を見て) 嘘だろお？あんだ、そうか！
 一香 え、あ、母と、どういう関係で、
 マナ 別にどんなもこんなもないよお。ただのワンサカだよお。はー、変な子だ。(やはりライターはつかず)
 ゴン なつかしいなあ。こうモヒカンで百キロくらいあつてモロツコで性転換したっけなあ。
 マナ いっつもこーんなレオタードで男女構わずイエイエイエしてね。(ジェスチャーは股から両乳出て両肩まで)
 ゴン 政界の要人からホームレスまで組んず解れっ。
 マナ で結局シスコで、サンタナのマーカスト。
 ゴン あんたそんな時の子だろ？
 マナ ほら五回転逆子の、ベッチーちゃん。ギネスに載ったねー。
 一香 いえそれは、多分違う人です…
 マナ あ？
 ゴン はいじゃあんたもイケる口だろ？飲もう飲もう今日は飲み明かしちゃおう。(しかし唐突に眠くなる)
 マナ ゴンちゃんあんたまだ飲めるのか、あたしはもうちょっとしか飲めないよ。(一香に) 悪いね、あんま飲めない…。(同じく唐突に眠くなる)
 一香 ……あ。なんで急に。…ちょっと。寝ちゃうんですか。寝ないで下さい。母とはべりっとう…
 マナ マナ・ゴン(寝る)
 一香 ……あ。
 マナ (唐突に起き上がり) だからま、いつでも来て。またみーんなでさ、派手にやるうよ。じゃ…(と奥のドアへ)
 ゴン (立ち上がり小さく) プールサイドにフッフフフン！イエイエイエ、フッフフン…(同じく奥のドアへ)
 一香 あ、待って下さい。母とはべりっとう。
 茜 (慌てて一香を止めて、首を横に振るなど)

一香 ああごめんさい、(二人を玄関ドアの方へ連れていく)とりあえず出てって下さい、お願いします、あ、家財道具なんかは、マナ え？ないよお、そんなん(笑)
ゴン 着の身着のまま波任せ〜♪
一香 じゃあ早く、(二人を押し出す)
マナ ああもうなんだよ。約束だよ？またここで、皆んなで派手にさあ……。あ、ちょっとなんだよ……

一香、マナとゴンを玄関に続くドアから追い出す。

茜 (玄関に続くドアを閉めようとしながら)で、誰だったんですか…？

一香 (マナとゴンが気になりつつ)…さあ。

そのドアから、ちょっとお洒落な中年男女(心臓と肺)、様子を伺いながらやって来る。

心臓 :あ、大丈夫でしたか？ :びっくりしましたね。

肺 なんなんでしょうね、あの人たち。怖い…。

一香 えっ、

心臓 あ、いやすいません、思わず。(茜に)あ、突然どうもすいません。大丈夫でしたか。

肺 だってねえ、あんな。まさかだったでしょ？(茜に)怖かったわね。

茜 (一香を見る)

一香 あ、あの…

心臓 ああ大丈夫ですよ。分かっています。

肺 今日からこちらにご入居でしょ？(茜に)よろしくお願いします。末長く。

心臓 (茜に)どうぞよろしく願います。

一香 (よく見るが、見覚えがない)すみません。失礼ですが…

心臓 え？ああ！(唐突にはっはっはと大きく笑う)

一香 (驚き、鼓動が早まる)

心臓 (一香の驚きに合わせて激しく全身で鼓動しながら)ああ、ごめんさい。申し遅れました。私は心臓です。

肺 私は肺です。

一香 は？

心臓 あ、あなたの。

一香 えっ私の？！(そして激しく咳き込む)

肺 (それに合わせて激しく伸縮しながら)ええ、ほんとごめんさい。

茜 (思わず一香を支えながら)え、：なんで一香さんの、心臓が…

一香 (なんとか深呼吸をする)

心臓 (動き治まりつつ)ああ申し訳ない。私は普段はX号室に居るんですがね。さっきの騒ぎを聞いて思わず、

茜 エックス？

肺 (動き治まりつつ)ああはい、私はY号室。

茜 ワイ？

心臓 ああそれからZ号室には一香さんの陰部が…

茜 (遮って)え、あの、ちょっと待って下さい。(一香に)そんなにたくさん部屋が、

一香 ううん、ないない、

心臓 (笑って)いやありますあります。今もまだ、増え続けているんじゃないかな。(ソファに座る)

肺 ええ。Zの次からは、アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ：(ソファに座る)

一香 え、なんで…
心臓 だって零奈さんが、部屋の増殖を始めたまんま、
肺 ええ。それを全然、止めないから。

女性警官、玄関に続くドアから入って来る。その後上手の棚のレジ袋を手に取りドアへ戻っていく。

茜 (警官を見て) あ。

一香 ……じゃあ、増殖しっぱなし？

心臓 ええ。(タバコを唾える)

一香 ここに、なんで私の…

肺 ああだって空き部屋いっぱいあるから。(タバコを唾える)

心臓 使わないと、もったいないでしょう。(タバコを唾える。しかしやはりライターの花はつかない)

一香 茜ちゃんごめん、私ちょっと母んとこ行ってくるから。だから、あー、私の心肺機能と、一緒に居て。

茜 あっでも今、(警官さんが)

一香 え？(と振り返り、心臓と肺を見て慌てる)：あっ。ちょっとやめてやめて、私、タバコは、

心臓 (笑い) いやいやいや。なーんにも面白くもない毎日でしょう。ねえ。こんくらいはしないぞ。

肺 (その間に小袋に入った白い結晶をテーブル上に出し、ライターで碎き、紙切れで線状にしている。慣れた手つきで2本)

心臓 だから我々はこうして、いい感じだね。

肺 (その粉を、鼻から思い切り吸い込む)

一香 あっ！何吸ってんですか！

肺 あー…(効いた声を漏らす)

一香 あー…(同じ声を漏らす)

茜 ……一香さん？

一香 ああ何？ごめん。

心臓 (粉を吸い込み、声を漏らす) あー……

一香 (同時に同じ声を漏らし) あー…：じゃあ。(笑顔を茜に向けて) 分からないことがあったら何でも聞いてね。私はこれで。

茜 (おじぎ。そして歩き出す)

え、

肺 (その間にゴムで自分の腕を縛って、血管を出すためにトントン叩いている)

茜 (肺の行為を見て) あっ！

心臓 じゃ。我々も戻って、もう少し。(腕をゴムで縛りながら立ち上がる)

一香 ええ。ありがとうございます、じゃまた。(玄関に続くドアへ)

茜 ……ちょっと待って下さい一香さん、(一香の腕を取って引き留めて) いいんですか？大丈夫ですか？

一香 (楽しそうに) え？なに？なにが？

心臓と肺は自分の腕を盛んにトントンしながら、玄関に続くドアから去っていく。

入れ替わりに、十里と男性警官、レジ袋を持った女性警官、入って来る。

入ると、男警官、玄関に続くドアを閉める。

搜索開始

お茶回し・ダンス一(仕事・一香と十里)

G号室

十里 ……あんた。搜索願ひ取り下げといてって言ったのに、また忘れてたでしょ。

一香 え？

十里 どうしてそれっくらいのこと出来ないの。警官さん来てくれちゃったよ。

一香 あ。
十里 もう何も任せられないじゃん、困るんだってそういうの。

一香 ああ、そっだそっだ、そんなことより大変だよ！急いで何とかしないと、
十里 何。

一香 …。(茜に)何だっけ。

茜 え？ああ、なんか部屋が？(一香うなづく)増え続けているみたいです。どんどん。

十里 え？

一香 ああほら、もう少し部屋増やそうかって、前に母さん言ってたじゃん。で、増やし始めたはいいけど、そのまんまになってる
みたいで、

十里 えっ(茜に)本当に？

茜 (うなづく)

女警官 (開きっぱなしの奥のドアを閉める)

十里 そのまんまって、え、いつから？え、どんくらい？(一香、首を傾げる。女警官からレジ袋を奪ってレジ袋に) どういうこと？どこに連絡すればいいの？リフォーム会社？(一香に) 連絡先は？

一香 あー(と慌ててスマホをいじってみるが)ないや。

十里 なんてーもー(レジ袋を叩いたり振り回す等しながら) 母さん早くなんとかしてよ、何とか言ってよ！何なの最近！

茜 ああっ(袋が破れてしまおうと慌てる)

男警官 あっ、ちよっとすみません、

女警官 落ち着いて下さい。

十里 (レジ袋を振り回す等しながら)ほんとにすみません、母も一香もご迷惑ばかりで、

男警官 いえ。今お調べしましたところ、これは霧奈さんじゃありません。

十里 え？

女警官 ゲロの入ったビニール袋です。

十里 …は？

一香 (笑って)何言ってますか。だってほら…

一香と十里、袋をよく見る。少しの間。そして気づく。

一香・十里 うわあああああああ(と叫んで十里、レジ袋を台所の方へ投げ飛ばす)

男警官 (一香に) あ、どうも。その下北沢交番の者です。(手帳を見ながら) こちらの多次元物件から、北沢警察署に捜索願を出されたのは、行方が分からなくなってから三日目ということだ。

一香 あ、はい、そうですけど、

十里 (吐き気をもよおし、えづく)

茜 あ、あ、(と急ぎ靴を探る)

女警官 (手帳を見ながら)ということ、明日でもう一週間になりますが。連絡や目撃情報なんかは、まだ何も？

一香 あ、はい。

男警官 では失踪前のご様子は。何かこれまでと違ったところはありましたか。

十里 (茜からレジ袋をもらい、袋に嘔吐)

一香 あー(十里と茜の様子を見つつ)無口でした。もともとそんなことなかったのに、だんだん無口になって。あと、体調がなんか悪かったみたいで、元気がなくて、肌がカサカサしがちで、なんかちよっと酸っぱ臭くもなっちゃって。ここんところはずっと、塞ぎ込みがちで…

十里 (ゲロの入った袋を訝しげに見ている)

男警官 (女警官に)：署に報告して。ちよっと捜索を急いでもらおう。

女警官 あ、はい。(手帳を仕舞う)

男警官 零奈さんと親しい方や、行かれそうな場所は、

茜 あっ！あの(と、遮って)から、零奈を指差す(……。

全員 (指差す方を見るも、無反応)……………。

男警官 (茜に) なんですか？

茜 (諦めて) あー…。じゃあ零奈さんの部屋。A号室を調べて下さい。(一香と十里に) ほら、特にまだ、行ってみてないんですよね？ 誰も……。

一香 ああうん。

茜 だからそこをまず…。調べた方がいいと思います。

一香・十里 (ああそうかと思ふ)

男警官 (一香と十里に) じゃ、とりあえずいいですか？ 入らせて頂いても。

一香 ええ勿論。

全員 (ドアに向かう)

茜 ごめんなさい。

全員 (立ち止まる)

一香 え。なんで。なんで謝るの。

茜 …。

一香 ねえ、ちょっと(笑)。

男警官 よし、A号室行くぞ。

女警官 はい。

全員、玄関に続くドアへ。

女警官 :あ。：なんだこれ。(ドアノブがない)

男警官 :あ。どうしました？これ。(ドアノブがない)

一香 あれ？(ドアノブがない)

十里 あっ。：ポプ？

一香 ぽぷ？

男警官 (女警官に) おいサブはどうだ？

女警官 (奥のドアを見て) いません！

十里 (探し回って) ノープ…！え…どこ行った…？

男警官 (ドアを開けようとしており) ダメだ、開かないな。

女警官 (奥のドアを開けようとしており) ああ、こっちもダメそうです。

一香 じゃあ勝手口から、(台所の方へ行こうとし)

十里 (それを押し退け、劇場出入り口に走る)

男警官 あーやっぱりダメだ。(一香に) このドア、壊しちゃっちゃまずいですよね。

一香 え、それは…

男警官 (女警官に) しょうがない。助けを呼んで。

女警官 はい。(無線機を出す)

十里 (戻って来ながら) え？なんで？ラブもシノブも、シェイコブも居ないんだけど。(ついでにレジ袋を拾い)

一香 じえいこぶ？

男警官 あ、大丈夫です。今助けを。

十里 (レジ袋をゴミ箱へ捨てる)

女警官 (無線に) 北沢から各所。只今二丁目十番ハイタウン地下階で、

無線雑音混じりに音声。上品な中年女性「ほらしっかりとお味をまぶさないからですよ」観覧客笑い声。

男警官 あれ、なんだこれ。(と女警官から無線を取りいじる)

雑音から音声。マナとゴン「マナティジュゴンの、下北ブクブク水中ラジオ」大人なジングル。

一香 あ。

十里 (一香が手に持っているスマホを奪う)

男警官 なんだ？(無線をいじる)

古い「レナウン」のCMがかなりの雑音混じりで微かに。「プールサイドに(雑音) イエイエイエイエ(音飛び)レ

ナウンレナウン娘が(音飛び雑音と共に) ワンサカワンサ(雑音)「

雑音と共に、ぶら下がった零奈の辺りが、ビリビリと光る。

茜 ……。(光る零奈を見上げる)

女警官 無線ですか？地下だからですかね？

男警官 (無線機を弄りつつ) いや電波がなんか変だ：

十里 (スマホをいじっており) あれ？なんで？スマホもダメかも：

女警官 (一香に) あーどなたか帰ってらっしゃいますよね、住人の方とか、

一香 あ、はい。多分、誰かしら、

男警官 じゃあそれを待つしかありませんかね：すいません。(無線を仕舞いつつ)

一香 ああいえ、

茜 : あっ、じゃあお茶。(先程の鞆を再び探り) お茶あったんで、入れてきます。(茶筒を出して急ぎ台所へ行くとするが)

一香 あ、ポットならここに。多分お湯も入ってるから。(と上手の棚の電気ポットを取りに)

茜 え：、ああ：(仕方なく戻ってくる)

十里 (スマホを諦め)：で。とりあえずどうすんの。

一香 え？

十里 ほら部屋。(下手の棚の急須と湯呑みを取りに行きながら) あと、このドアの事も。あんた何とかしてよ、私時間ない。

一香 え。無理。(テーブルにポットを置く)

十里 無理ってもう。いい加減にして。(湯呑みを並べ始める)

一香 (茜に) あ、ほら座って。警官さん達も。どうぞ。(お茶を入れ始める)

男警官 ああ、じゃ私もはそっちに。(※テーブル脇の床に、上手側に背を向けた状態で)

十里 ああでも、

女警官 いや汚しちゃうとあれなんで。(※テーブル脇の床に、下手側に背を向けた状態で)

十里 なんかすいません。

十里と一香と茜、ソファに座り、警官らも手伝いつつ、お茶を入れながら話す。

一香 つかあんたが仕事辞めて、色々すりゃいいじゃん。つかしてよ。

十里 は？なんで。

一香 だっていつとも仕事疲れた疲れたって、

十里 そりゃまあ、

一香 だったら辞めてここやりやいいじゃん。それで千紘にやりやいいじゃん。

十里 母さんはあなたに、「ここ残すって言ってんだよ。」

一香 いいよいらないよ。もらっても残さないよ。(とお茶を隣の茜に渡す)

茜 あ。(と、渡されたお茶を女警官に渡す)

女警官 はい。(と、渡されたお茶を男警官に渡す)

十里 だってそしたらあなたどつすんの。(お茶を男警官から受け取る)

一香 せいせいする。(お茶を隣の茜に渡す)

十里 :は?何も出来ない癖に何言ってるの、そんなことだから、(お茶を一香に渡す)

以降、五人分のお茶をそれぞれ隣の人に渡しながら、会話を続ける。

茜 あ、十里さんはお仕事は何を、(と、続く小言を遮るために言う)

十里 え?ああジム。不動産会社の。

茜 あ、五郎さんのこの、

十里 違う違う。あっちはアパマン、こっちはミツイ。

男警官 おお、業界最大手。

一香 その資産運用部の営業だったんですよ、バリバリの。でもやめちゃって。もったいない。

十里 いや、営業で育休は厳しかったんで。今はパートですから。

一香 あたしが世話するって言ったのに。

十里 あんたにや無理。

一香 で。今はそのジムで。

十里 毎日を苛め抜いています。

一香 クライミングとかもやってて。こないだオリンピックのね、予選にも通過して。

茜 え。

十里 だからもう毎日クタクタで。

男警官 パートなの?

一香 (男警官は無視して十里に) うん、だからさあ、

女警官 ん?

十里 (一香を無視して茜に) 茜ちゃんは?どうすんの。これからなんでしょ?仕事。

女警官 あの、お茶、回ってます。

茜 ああ。色々考えてはいるんですけど、

女警官 お茶、回ってます。

茜 とりあえずオーエルでもしようかなと。それか、主婦か妊婦か、シングルマザー。

十里 え?

一香 あれ?結婚、すんの?してるの?してたの?

女警官 あの…、

以降も全員にお茶が行き渡っているも、話は止まらずお茶も回り続ける。女警官のみ、それを気にする。

茜 (笑って) いえいえ女の資格を取ったんで。あ、皆さん持ってますよね?女の資格。

十里 え?

茜 一昨年かな?国家資格に認定されたの。だから即効取ってこっちへ。

一香 なにそれ。

茜 だから、国の「女らしいこと」全般を担当するやつですよ。主婦とかだけじゃなくて…、ほら、話題のスイーツ屋にあり得ないほど行列が出来たり、可愛らしい小物やキャラクターが異常に流行ったり、アイドルとか犬猫見てワーキヤー騒いだり、するじゃないですか。あれです。

十里 …はいい？

茜 あと大した下ネタでもないのに妙に恥ずかしがったり、バレンタインにあちこちチョコ配ったり、一香 ああ、職場でちよいちよいお茶入れたり、あちこち無駄に花を活けたり？

茜 そんなでコロッと寿退社したり、それかお局になって後輩をいじめたり、

一香 脈絡のないヒステリー起こしたり、支離滅裂なウーマンリブかざし始めたり？

茜 そうですそうです、そういうの全般です。

男警官 あ、あれ皆んな仕事でやってんだ。

茜 はい。国の検定内容に則って。主に国のおっさん達の支持で。

一香 ああセックスの時に終始アンアン喘いだりもか。

男警官 (手が止まる。全員のお茶が止まる)

女警官 …あ。止まりました。(と言つと、お茶を飲むとするが)

十里 でもさ。他に考えてみてもいいんじゃない？(お茶を一香に渡す)

一香 えーいいじゃん。ねえ。(お茶を十里に渡す)

女警官 あっ、逆回りです。(お茶を男警官に渡す)

茜 でも他に出来ることなんかはないんで。(お茶を女警官に渡す)

女警官 逆回りです。

逆回りで、高速でお茶回り続ける。

十里 いやまだ若いんだし、色々あんでしょ。

茜 いや私なんか、プルトニウムの生成つくくらいしか出来ないんで。

十里 プルトニウム。(一瞬、全員の手が止まるも)

茜 はい、すいません。(お茶を渡し、再びお茶は高速回転)

一香 ね。ね。その女の資格ってどこでどうやって取れんの。

十里 ちょっと。あなたはここのことちゃんとしな。

一香 えー。

十里 母さん戻ったらちゃんと話すか。つかまじで母さんどこ行った？

一香 じゃあまたポスターでも貼るか。もっと沢山。

十里 じゃあフェイスブックとツイッター、ユーチューブとインスタ、ライン、(お茶をお盆に返す)

一香 ティックトックとワッツアップ、ピントレストとスナチャとミクシィにも、(お茶をお盆に返す)

十里 よっし！(立ち上がる)

一香 (お茶を素早く回収し、お盆を棚に持っていく)

女警官 ああ。(結局、お茶飲めず)

十里 茜ちゃんセッティング。

茜 え？

一香 その辺ほら、なんかいい感じに。

茜 あ…。(立ち上がるもどうしていいか分からず)

十里 (茜の尻を思い切り叩いて) 自分の頭で考える。(そして棚からスマホスタンドを取って用意し始める)

一香 警官さんたちもご協力お願いします。その辺そっちに、

男警官 あ、(とりあえず立ち上がる)

一番 こういうのは雰囲気的大事だから。

警官ら、よく分からないままにソファとテーブルを舞台後ろの方へ移動させる。

唐突に、過剰に雰囲気のあるライティングで、部屋、照らされる。茜、見上げる。

十里 お。なんだよ茜ちゃん分かってんじゃん。(スマホをスマホスタンドにセッティングしながら)
茜 えっいえ私は、

一番 あっえっいつうっえっおっあっおっ、(発声練習)

十里 はい表情筋。(顔を動かす)

一番 ぬおおおうおおい、ぬおおおうおおい、(など体を激しく振りながら発声練習)

十里 はいじゃ本番。(スマホをタップ)

音楽イン、照明動き出す。一番と十里、雰囲気に溢れる。

以降、歩きながらカメラ視線など、ドラマチックに。

一番 失って気づく、

十里 かけがえない存在…。

一番 私たちの母、万零奈が姿を消して、一週間が経ちます。

十里 情報をお持ちの方はどんなことでも結構です。教えてください。

一番 警察も全面的に協力してくれています。(警官を紹介)ありがとうございます、ありがとうございます…

警官ら (とりあえずカメラに挨拶)

十里 母は最愛の人です。誰にでも親切で明るくて、いつも皆んなのことを…

一番 お母さん、もしこれを見たら、見ることが出来たら、どうか、

十里 どうか連絡を…

警官ら (自らフレームイン)

唐突に玄関に続くドアと奥のドアが一気に開き、照明戻り音楽カットアウト。

同時に玄関に続くドアから奥のドアから、五朗と千紘が雪崩れ込んでくる。

五朗 おい、大丈夫(か)

十里 あああああああああ…

一番 もおおおおお…んだよ！バカ！

十里 死ね！

警官ら (立腹)

五朗 …え？(全員に)何をしてるんですか。

一番 シッ！

十里 じゃあテイク2。(と言ってスマホを少し遠ざける)

五朗 …え？何だよどした、

十里 (それを振り払い)じゃあ次、…派手にいこう。(スマホをタップ)

ファンキーな音楽イン。ぶら下がった零奈が眩く照らされ、派手な照明に切り替わる。

十里 (スマホに) 万零奈の情報は、
一番 (同じく) ハッシュタグ「母さんどこ行った」まで。
五朗 あ。

五朗と千紘はそれで察したらしく?、茜以外、唐突に一斉に、踊り出す。激しく。
ダンス中、ぶら下がった零奈を派手に照らすところ有り。茜は呆然とダンスを眺める。
渾身のダンスの最後、音楽のままスマホスタンドを片しドアを映写時状態にし、盛り上がったまま全員退場。

FILM 搜索活動

伸びる閲覧数。トレンドは最上位。

横断幕。「Reina」「零奈」「#母さんどこ行った?」

カーサワの家族と住人、揃いの搜索キャンペーンTシャツを着ており、必死の呼びかけ。マイクで演説。

「零奈さんを探して下さい」「母さん連絡して」「皆んなで探しましょう」「帰ってきて」など。

群衆の大歓声。盛り上がる会場。

ニュース番組。背景に「Reina」。胸に「Reina」バッチ。

男キャスター 情報をお持ちの方はこちらまで。

女キャスター どんな情報でも構いません。

少し離れたところから、騒ぎを呆然と見ている茜。

駅構内広告モニター。ビルの大型モニター。バス広告など。ヘリコプター。飛行船。アドバルーン。街宣カー。

搜索キャンペーンが街に広がる。ビカビカと光るそれら。

ミュージシャンたちも歌う。レイナ!母さん!どこ行った。レイナ!母さん!どこ行った。

そして記者会見。カメラシャッターのストロボ。空から稲光のストロボ。茜、空を見上げる。

一方、青森県六ヶ所村。広い草原。そこに一人佇む、茜の祖母、董の後ろ姿。

董が口から息を吹くと、そこにも稲妻が光る。鼻息を漏らすと、そこにも稲妻が走る。

中年キャスター ニュースです。先日よりプルトニウムの生成が追いつかなくなった六ヶ所村ですが、

先ほど新たな風力発電が開発され、これにより全国の電力は：

董の鼻息の稲妻が威力を増す。手を揺らして風を起こすと、その軌道に稲妻が激しく光る。やがて董は空と通電。

音楽はフェードアウトして、映像オフ。雑踏の声。

搜索中 1 侵入者・掃除機・ヘッドホン・ラーメン (十里と五朗) E号室 / C号室

雑踏の声のまま転換。キューで明転。外の人たちの騒つく声が聞こえる。

ドアは全て、少し開いた状態。ソファとテーブルは、元の位置に戻っている。

ソファにはアンパンマンの顔のはみ出したウーバーアイツの鞆を抱え、配達員が座っている。

配達員は白長袖Tシャツにオーバーオールにコック棒。外ハネのおかつは頭の女。

そこにスーツの秋野、鞆を持ち、くたびれた様子で玄関に続くドアから帰宅。E号室。

秋野 (外を気にしつつ、開けっ放しのドアを不審に思いつつ、入って来る) ……ただいま。

配達員 (秋野を見る)

秋野 えっ、

配達員 (会釈する)

一香 あっ！ すいません、秋野さん。今、お帰りで？ (と、慌てて同じドアから入って来る)

秋野 ええ、

一香 ごめんなさい、週末なんで母の搜索ボランティアの方々が、ほら、外に三百人くらい居たでしょ。(映像と同じ搜索キャン

ペーンTシャツを着ている)

秋野 ああ……。 (Tシャツを見る)

一香 (秋野の鞆を取って) だからちよっとバタついてるけど、もうすぐ一旦解散するから。

秋野 ああはい…。

一香 だからとりあえず休んで下さい。ね。(と奥ドアの方へ秋野を促す)

秋野 (あ、ドアノブがない…と思つ)

配達員 すいませーん(立ち上がった) ご注文の方、いました？

一香 ああごめんなさい、なんかいなかった(みたい)

配達員 (食い気味に) えー。まいったな。また遅延でバッド評価かよ。

一香 え？

配達員 こないだなんか空に居て。そんなん位置情報じゃ見つからねっつ。(アンパンの頭を叩く)

一香 あ。(その頭を見る)

配達員 いったもこんな感じで(鞆から頭を出してポンポン叩き)：なんかちよっと、クーポン狙いっばいんすよね。

一香 (その顔を見ながら) クーポン？

配達員 ええ。(そして鞆から顔を出して掲げ) すいませーん、誰かこんな顔のあれ：ほら、見ませんでしたか？ (と、玄関に続く

ドアから出ていく)

同時に奥のドアからアンパン○ンなのか、それらしき者が欠けた頭とボロボロのマントで、フラつきつつやって来る。

しかし頭は胡麻模様。外はまだ騒がしい。

一香 あっ(配達員の出でいった先へ) いました！ 多分。(胡麻頭に) そうですよね？ (配達員に) ちょっと、

胡麻頭 (慌てて) ああごめんなさい違います、違っんです：私：(よるめく)

一香 あ、大丈夫ですか。(秋野の鞆を下ろす)

胡麻頭 いやね、私はお腹をすかせた子のためにね、飛んで来たんですよ。なのに：(倒れ込む)

一香 ああ、(胡麻頭に駆け寄り)

胡麻頭 なのに私、いきなり撃ち落とされました。そこをね(上を指す) 飛んでたらバーンとね。ほんと酷い。

一香 (その頭の匂いを嗅いで)：ん？ 香ばしい。：あ、胡麻団子？

胡麻頭 なんかあれですよ、急に撃たれたんです。ほんとに急に。ああ酷い。

一香 …。(胡麻頭の衣装を観察する)

胡麻頭 (なんとか立ち上がりながら) 何日もかけてはるばるとね。ここまで飛んで来たっつのに、

一香 え？ どこから飛んで来たんですか？

胡麻頭 (西を指して) ああ北京。：んー。いやほら。あっちの方だよ。：ヤマナシかな。

一香 あー：バツタもんですよ。

胡麻頭 なんですか？

一香 バツタもん。

胡麻頭 ……は？

一香 まあとりあえず出てって下さい。それか通報しますから。(胡麻頭をドアの方へ押しやりつつ)

胡麻頭 いやお腹をすかせた子がこの辺にいるはずなんですよ、なのに急にこーんなね、

一香 ああ領空侵犯ですから。威嚇行為かスパイ行為で、

胡麻頭 えっ?! そんなつもりないですよ!私。

一香 (マントを捲って) でもほら、高性能カメラとか。あとなんか、色々担いでますから。

胡麻頭 えっ?! (背中を振り返る。確かに背負っている) ……ああまあ。国の政府的にはそういう意図もあるかもしれませんが。

でもですね、私はほんとに:(背中のカメラのストロボが光り、シャッター音が激しく鳴る)

一香 ああもうすいません、これも人んちなんです。(胡麻頭を玄関に続くドアの方へ)

胡麻頭 いやでもお腹をすかせた子が、…あっお願いします。あっお願い、(押しやられる)

玄関に続くドアから胡麻頭が出ていくと同時に洗面所のドアが動き、毛髪が無いか薄く、素っ裸の赤子、コロコロと小さくやって来る。一香と秋野はそれに気づかず続ける。外はまだ少し騒がしい。

一香 ほんとにごめんなさい。疲れて帰って来たつてのに、勝手にこんな、

秋野 ああいえ、(鞆を拾う)

一香 なんか、ここ数日はずっとお留守で…

秋野 ええ、

一香 まあ、このところはなんだかいつにも増してお忙しいんですね。どっぞゆっくり寝て…(赤子に気づく)

赤子 :ああっ! すいません、すぐに出ていきます。しかし言い終わる前に堪えきれなくなって泣く。産声)

一香 あっちょっ、大丈夫ですか、

赤子 ああっほんつとすいません、ちょっとあの、道に迷ってしまったようで、

一香 道に?

赤子 ええ、さっきまで産道をこつ、通ってたはずなんですよ、なのに…ああ…(臍の緒がプらプらする)

一香 ……あ。(臍の緒を見て)

赤子 ああつ(恥ずかしそうに慌てそれを手繰って)切れてしまいましたもつ。なのでここがどこやら…

一香 (秋野に) あ。産婦人科? どっか近くの。そこに電話を、

秋野 (ポケットのスマホを探る)

赤子 いえいえいえ! お気持ちは有難いんですがやっぱりこうちゃんね。だってそんな、いきなりドアからこう現れたんじゃ

ほら、台無しじゃないですか、そんなの:(悔しい)

一香 ああ…

赤子 ……ああほんとに申し訳ないことをした。最初からこんな…(泣く。産声)

一香 ……あ。あの。じゃ(洗面所を指し)如何ですか? 産湯。あ、それがミルクを今オオゼキで、あ、それか胡麻団子…

赤子 (慌てて止めて) いえすいません!(なんとか立ち上がりつつ)やはりここは母乳でないと。免疫力とか色々…

玄関に続くドアから、五朗と十里、入って来る。揃いのキャンペンTシャツを着ている。C号室。以降、十里、上着を脱ぎ、五朗、十里の鞆をソファに置くなど。外の騒がしさは徐々に治まっていく。

赤子 じゃ失礼いたしました、(ヨタつきつつ玄関の方へ。秋野に) あ、どうぞゆっくりお休みになって下さい、

一香 あ、あの、気をつけて下さい。(ヨタつく赤子に) ああっ…気をつけて…

赤子 (産声。しかしなんとかドアから去っていく)

五朗 凄い騒動になったね。

十里 ああそつだね。

一香 (床を見て) ああ、羊水やら何やら…。ごめんなさい、掃除しときますね。(と、雑巾を出し)

五朗 つか大丈夫なの？ここ。

十里 え？

五朗 ほら。零奈さん居ないまんまでぞ。

十里 ああ。一番がいるから。

一番 ああいいんですいいんです、こっちの責任だし。後でドアも直しておくんで。どうぞ休んで。(床掃除を始め)

秋野 ありがとうございます。(奥のドアに去っていく)

五朗 (一番の目の前で)でも一番さん一人で大丈夫なの。零奈さんの手伝いなんか全然サボってたでしょ。雑巾掛けすらまともに出来ないでしょう。

一番 (雑巾がうまく操れず声を漏らす)あああー、

十里 (一番の目の前で)だからちよつどいいよ、練習練習。この大家やるしかないんだから。この先、一生。

一番 (更にイラつき)ああああーもう！

五朗 まあ、そうか。…じゃあ、俺は一旦帰るから。

十里 ああはい、どうぞ。さようなら。

五朗 あ。その前に千紘に、

十里 いいよ。なんか、慌ててどっか行っただし。

茜、玄関に続くドアからやって来る。やはり揃いのキャンペーンTシャツを着ている。

茜 今、外の皆さん、解散しました。あと千紘ちゃんのヘッドホン、やっぱり見つかりませんでした。

一番 ああそう、(床を拭く手が止まる)

茜 あ、掃除ですか？手伝います。

一番 え？悪い。

茜 いえいえお役に立ちたいんです。(と、一番の横に座って)ところで一番さん、ちよつとお話が、

一番 よっし(と、立ち上がって)じゃ、あとこの辺よろしく。ありがと。(雑巾を茜に放ると、洗面所の中へ)

茜 ああ。(仕方なく床掃除を始める)

五朗 …。あいつさ、友達いるの？

十里 (笑って)何それ。何アピール。

五朗 いや別に…。

十里 なんか。最近なんなの。調子ん乗っていい父親ぶらないでくれる？

五朗 え。そんなつもりは、

十里 つもりはなくてもそうなるよ？千紘にとつちやたまにしか会えない貴重なお父さんじゃん。それが急にこんな親身になってとかさ、やめてよ。だからほら、殴ってここんとこ。

五朗 え。

十里 D.V。ね？ほら青あざ作って。さあ。こいよ！

五朗 なんだよそれ、やめるよ。

十里 思春期なんだよ。なんか色々ややこしいんだよ。私の話なんか、もう全然…

茜 (二人のやりとりに、完全に手が止まっている)

十里 …。

十里 あ。ちよつやめて。触らないで。

五朗 あのな、俺、ちよつと話が…、

十里 何。

五朗 うん。…だから俺たち、この先さ…

そして五朗が何か言おうとすると同時に、デカい掃除機の音、聞こえ出す。
一香、洗面所から掃除機をかけながら出てくる。けたたましい音。

茜
あ：

十里
(何か言っているが聞こえない)

茜
(二人の会話、聞きたいのに聞こえない。急いで洗面所に走る)

五朗
(何か言っているが聞こえない。十里の両肩に手を乗せるなど)

十里
(五朗の頬を平手打ち)

掃除機の音、やむ。

一香
：あれ？(掃除機の故障か?)

十里
そんな簡単に言わないでよ！

茜
(掃除機のコンセントを持って、急いで洗面所から出てくる)

一香
(掃除機を叩いてみる?)

五朗
簡単になんか言っただけだよ！真面目にこれから、

茜
(コンセントを持ったまま二人の会話に期待)

一香
(しかしまた掃除機をかけ始める) ガーーーー！ガーーーー！(掃除機の大きな音を、口で出し始める)

茜
あ。なんで。

五朗
(何か言っているが聞こえない)

十里
(何か言っているが聞こえない)

一香
ガーーーー！ガーーーー！ガーーーー！ガーーーー！

茜
ちよっと！(と思わず一香の腕を取る)

一香
ウイーン：(と手を止めて) え？なに？

茜
(一香の腕をとったまま五朗と一香を見る)

五朗
ほら昔、言ってたよな、(と続けるも)

一香
(同時にまた掃除機をかけようとし)

茜
(同時に思わず一香の口を塞ぐも)

一香
(塞がれたまま掃除機をかける)

十里
ウイーン、ガーーーー！ガーーーー！(※五朗が何か言っているが、声、聞こえない)

茜
……え。

一香
(掃除機止めて方向転換)

十里
でもあんたその時に、(と続けるも)

一香
(掃除機またかける)

五朗
ガーーーー！ガーーーー！ガーーーー！(※十里が何か言っているが、声、聞こえない)

茜
なんで？！

五朗
ガーーーー！ガーーーー！

茜
一香さん、一香さん、(と一香の腕を掴む)

一香
(掃除機をかける手を止めて) え？なに？なんなの。

五朗
ウイーン：(掃除機音やむ)

茜
ねえ、それやめ(て)。と言いつつ終わらぬ内に)

一香
(掃除機をかけ始める)

茜
ガーーーーガーーーー！

一香 (掃除機止めて方向転換)
茜 えっ?なんで?!
一香 (掃除機またかける)
茜 ガーガーガーガーガー

千紘、玄関に続くドアから入ってくる。E号室。

千紘 (ガーガー言ってる茜に) : 何やってんの。(やはり揃いのキャンペーンTシャツを着ている)
一香 (掃除機をやめ) あっ!そっだ茜ちゃん、ちょっと一緒に来てー(そしてまた掃除機をかけつつ、玄関に続くドアの外へ)
茜 ガー。あ、千紘くん一香さん止めて。ガー!...あ、ちょっとそれ止め、ガー!... (一香を追って去っていく)

千紘はE号室に残ったまま。ヘッドホンはしていない。十里と五朗の言い合いは一先ず治まっている。以降、C号室。

五朗 :...もう分かったよ、悪かったよ。すいませんでした。

十里 分かれればいいよ。だからもう帰って。(五朗、歩き出す) :あ。勝手なことほしないでね。

五朗 え?

十里 この部屋。今はあれだけど、元通りにするんだからね。だから変な気起こさないですよ。

五朗 ああ:(また歩き出す)

十里 :.....なんで起こさない。

五朗 え:?

十里 ほらそういうとこだよ。こんだけ部屋あんだよ。私だったらもうとっくに全部屋、契約成立してんだよ。

五朗 え..。

十里 え、じゃないよ。顧客になりそうなのいっぱい居たじゃん。あーもー、あんたが私じゃなくてほんと良かった。あーあー、あんたが私じゃなくて残念でした。

五朗 (外の方を見て) ああ、

千紘 (ソファに座り、ちょうど二人の間に座る)

十里 :ああもう。凄い契約数だよ:(クソツ)ほんと馬鹿だね:(ソファかテーブルをしきりに叩くか蹴るなど)

五朗 あーうん、悪かったよ。

千紘 (ヘッドホンもなくスマホも弄らず、ぼんやりする)

十里 :え?今何に謝った?え?なんとなく?ああそうか、あの日のゴムが古かったことか?緩かったことか?

五朗 すぐに萎んで慌ててこんなしてこう、

五朗 (それを止めて) ああもうごめんって..

十里 ほら。全部あなたの尻拭いなんだよ、あれからずっと。ああそうじゃん、私の人生。そうなんだよ。

五朗 あー... (また始まった)

十里 もう絶対似て欲しくないから。ちよつとも似たら、あの子の人生、ほら、ね?もう終わりだから。つかもうすでに、ちよつと...ああ..

千紘 (たまたま五朗と同じ似た仕事や姿勢をとっている)

五朗 もう分かったって.....

十里 だからもう早く(帰って)

五朗 (遮って) じゃあ引き取るうか。

十里 あ?

五朗 千紘。俺が。

十里 :.....は?

五朗 ……………。なんちゃって。
十里 ……………。(何か言おうとするも)
五朗 うそっそ。俺さ、再婚するかもだから。
十里 (なんとも言えない表情)
五朗 (スマホをチェックしながら) だからこの先、ちょっと忙しくなるかも…
十里 ……………。
五朗 (スマホを仕舞って) じゃ、次の週末。(玄関に続くドアへ向かって歩く)
十里 (五朗がドアから去る直前、唐突に走り、鞆の紐で五朗の首を思い切り絞める)
五朗 ……!

一香、ブンチャ、ブンチャと前奏を口ずさむ二人と共に、玄関に続くドアからやって来る。以降、E号室。
一香 千紘ちゃん千紘ちゃん、あつたよ！あつた。
千紘 (一香らを見ずに) ……あ？

夏希と茜、頭に丸いものを被った状態で、頭同士が布かゴムで繋がっている。
一香はその布かゴムを持っている。色と形は千紘のヘッドホンと同じ。
来たと同時に夏希と茜、千紘の両脇に座り、千紘の耳元に歌い始める。十里は五朗の首を絞め続ける。

夏希 静かな湖畔の(ここで輪唱入る)森の影から♪
茜 (輪唱) 静かな湖畔の(次の輪唱入る)森の影から♪
夏希 もう起きちゃいかかと(ここで輪唱入る)カッコウが鳴く♪
茜 (輪唱) もう起きちゃいかかと(カッコウ)カッコウが鳴く♪
夏希・茜 カッコウ(カッコウ)カッコウ(カッコウ)♪
千紘 えっなになに、なにこれ？
一香 ヘッドホンだよ。
千紘 は？(夏希と茜を見る)
十里・五朗 (死闘中。五朗が逃げて十里が追う。五朗が声をあげる)
茜 あっ！(それを目の当たりにする)
夏希 春は名のみゆ、か(一段と耳の近くでソプラノ)
千紘 (振り払って) っるさいよ！つか、夏希さんと茜さんじゃん。
一香 (後ろから) え？違っよ。
夏希 (右から) え？違っよ。
茜 (左から) え？違っよ。(目は十里と五朗に釘付けのまま)
一香 ほらドルビーサウンド。
千紘 は？
十里・五朗 (死闘中。五朗、声を有げる)
茜 (五朗に対し) あああっ、
夏希 (右から左へ移動しながら) ほらドルビーサウンド。
茜 (左から右へ移動しながら) ほらドルビーサウンド。(目は十里と五朗に釘付けのまま)
一香 (千紘の目の前に移動して) ね？すっごい臨場感。
千紘 っるさいってば！(一香の腹に膝蹴り)
十里・五朗 (十里が五朗にとどめを。五朗の断末魔)

茜 ……
千紘 もう帰る。(と、玄関に続くドアの方へ歩き出す)
茜 あー…！(と、思わず千紘を止める。そして、そのまま歌へ)め……。が降れば……。(夏希を見る)
夏希 小川？
茜 小川。
夏希 が出来？
茜 が出来。
千紘 え、なんだよ…(ちょっと怖い)

以降、山賊の歌、徐々に盛り上がっていく。やがて三人、千紘の周りを回るか、千紘を持ち上げるなどしながら歌う。その間に十里は五朗にとどめを刺す。そして五朗が息を引き取ったところで、奥のドアから秋野。

三人 ヤホホイ、ヤホホイ！
秋野 ……あーもー！何なんですかさつきから…！(と、現れるなり地団駄を踏んで)眠いんですよ眠いんです！
茜 (ヒイと慄いて逃げる)
秋野 (まず夏希を掴んで、床に叩きつける。そして一香の頭を拳で一発、思い切り殴る。そして部屋に戻っていく)
一香 ……(頭を抑えてうづくまる)
夏希 (少しの間のおと、妙な形に立ち上がり)ジジッ！ジジッ…！(感情はない)ヤホ、ホホ、ホホホホ、
一香 (夏希を見て)あああ壊れた…、あああ壊れちゃった。
茜 え…。
一香 あああ…(慌てて夏希を連れて、玄関に続くドアへ去っていく)保証書…
茜 (一香らに着いていきながら)保証書？
十里 (山賊の唄を小さく鼻歌いながら息絶えた五朗を肩に担ぎ、洗面所に運び入れていく)
千紘 (一香らの方から目が離せないまま)え、なに…？壊れちゃったの…？ねえ！(追って去っていく)

十里、洗面所に入りドアを閉め、そしてトイレを流す音。前と違いゴボゴボと大量の水を流す。五朗の声、聞こえる。更にもう一回。完全に流す。同時に二葉、玄関ドアから。お洒落をした若い女性。以降、C号室。

二葉 あの…。
十里 (洗面所から顔を覗かせ)はい…？
二葉 あ、すみません…ずっとその上で待ってたんですけど、五朗さんと連絡つかなくて、
十里 ああ…！初めまして万里です。ほら元妻の。(手を服で拭うなどして、洗面所から出てくる)
二葉 ……ああ。初めまして、億田二葉といいます。なんか今さっき、断末魔みたいなのが…あと歌…(部屋を見回す)
十里 二葉さん。
二葉 はい。
十里 ま。ラーメン屋さんらしい素敵なお名前。ほら。荻窪の。
二葉 え…？
十里 で。味玉は？
二葉 ……？
十里 乗ってるの？
二葉 え？
十里 背脂は…？…。さっぱりちやっさちやっさ？
二葉 あの、

十里 ちゃっっちゃ？(庄)

二葉 ……。ああはい…ちゃっっちゃです。

十里 ああそうよかった。ちぢれ麺によく絡めてね。あ、ちぢれてるよね？(庄)

二葉 ああはい、…ちぢれてます、

十里 そう！こだわりのスープが自家製麺によく絡んでね。…え？荻窪だけ？

二葉 あー…(辺りを見回すなど)

十里 そんなもったいない！(二葉に駆け寄り)五朗なんかじゃ、いつか絶対潰れちゃうよ。でも私だったら二店舗め三店舗めの出店もすぐだし、全国展開も夢じゃないから…。(二葉の両手を取る)

二葉 は…？

間。素敵な音楽、ほんの小さく聞こえ始める。

十里 …ううん大丈夫。もちろん味も落とさない。

二葉 あの…。

十里 じゃ。早速戦略練ってリサーチかけよう(二葉の頬にキス)…でもまずは、ご自慢のちぢれ麺を、試させてね。

二葉 あ……、はい。(なんか恥じらう)

十里 (二葉の手を引いて歩き出す)確か、創業は40年前で、今は二代めだよな。

二葉 (手を引かれながら)さあ…どうなんでしょう。

十里と二葉、玄関に続くドアから去っていく。照明と音楽、素敵なまま。

捜索中 2 本部長・脳内物質・別人格 1 (二香と零奈) C号室 / E号室

音楽は続いたまま、茜(元の衣装)、女警官の手を引き、玄関に続くドアから戻ってくる。C号室。

茜 こっちですこっちは！

女警官 ちよっともう、引つ張らないで、

茜 いいから、(部屋を見て)あ、いない。

女警官 だからいったい、何なんですか。(茜の手を振り払う)

茜 えっと今ここで、十里さんと五朗さんが、十里さんが五朗さんの首を、こっ、(首を閉めるジエスチャー)

女警官 ああそういう件でしたら、百十番へ通報を。

茜 え？

女警官 今、出勤出来る者が居るかは分かりませんが、

茜 いやでも、

女警官 忙しいんですよ。北沢署は零奈さんの捜索に全勢力を傾けているんで。今の集会の警戒にだって結構人員が、

茜 ああ(外の方を見る)

女警官 じゃ。私、新しいポスター5パターンの企画デザインMTGがあるので、失礼します。(出て行くこととする)

茜 待って！(それを引き留めて)…じゃあ、お話します。

女警官 …え？

茜 だからその、零奈さんのことです。

女警官 ああ！それでしたら専用番号の方へ。(番号の書かれた可愛いカードを渡す)間違いや悪戯が多くて精査に時間がかかってますけど、順番に対応していきますんで。じゃ。(出て行くこととする)

茜 (その手を取って)いや今一聞いてくださいよ！ A号室です、A号室を見てもええれば…、
女警官 ああもう、順番なんですから、(その手を剥がそうとする)

茜 (しかし絶対離さない)

一香、ドアノブを三つ持って玄関に続くドアから戻って来る。E号室。

一香 (三つのドアノブを確認しつつ) ボブ、サブ、ノブ。ボブ、サブ、ノブ。

女警官 (なんとか茜を振り払い) わかりましたよ。じゃ今、捜索本部長に許可を取りますんで。そしたら。(電話取り出す)

茜 お願いますー急いで！(と言ってから、ぶら下がった零奈を見る)

女警官 (電話をかける)

電話の着信音が聞こえる。茜と一香、その音に、…ん？と、反応する。その音が近づいてくる。

奥のドアが開き、秋野が電話を構えて出てくる。髪は乱れてネクタイは外しワイシャツもはだけている。

茜 (秋野を見て)…あ。

女警官 あ、本部長。やっとご帰宅のところ申し訳ありません。今ですね、零奈さんの情報をお持ちだという方が、

秋野 は……………？(怒りで震え始める)

茜 …あつ！ごめんなさいごめんなさい！いいんですいいんです！(と、女警官の電話を奪って電話に)とりあえず、どうぞ寝てくださいおやすみなさい！(と、電話を遠くに放り投げる)

女警官 あっ何すんですか、

茜 わかりました、待ちます順番。すみませんでした！(と、頭を下げると玄関に続くドアへ走り去っていく)

一香 (ごわごわと秋野に)…どうされました？

秋野 (電話を放り投げ、奥のドアへ去っていく)

一香 あっどうぞゆっくり休んで下さいね、(ドアノブを掲げて)今、ちゃんとドアも直しますんで。これさもう色々、勝手に入って来なくなるんで！

女警官 (その間に電話を拾っており)…あ、もしもし？

一香 (電話に気づいて拾い)…あ、もしもし？

女警官 え、本部長？

一香 え、昆布だし？

女警官 …え。本部長？

一香 …え。なに？なに？

女警官 …。(電話をきる。そして首を捻って玄関に続くドアに去っていく)

一香 …。(電話を見つめたまま)

玄関に続くドアから、若い男女、やって来る。一香らと同じ揃いの捜索キャンペーンTシャツを着ている。

両者共、古くも今でも通用する、普遍的若者像。以降、E号室。

男1 (一香に)…あ、すみません。僕らさっき、ボランティアに参加していた者なんです。

女1 ねえやめなつて。ご迷惑だよ。

一香 ああごめんなさい。ここはその…(と奥のドアを見てから)昆布だしのお部屋なんで。

女1 昆布だし。

一香 だからもう帰ってね。ありがとう。

男1 ああいえ、ご迷惑は承知しているのですが。もしかしたらこちらに…(部屋を見回す)

唐突にトイレを流す音。音楽カットオフ。そして洗面所ドアから若い女、やって来る。揃いのキャンペーンTシャツ。

女2 ああごめんごめん、遅くなっちゃった！
男1 ああもう！よかったー、居た居た居たー！
一香 えっ、ずっとここに？
女2 ごめん、急にもよおしちやっつて(服で手を拭きながら)あ、この首姫、素敵ですね。
一香 えっ…？
男1 (笑いながら)探したよーもう勘弁してよー。
女1 ねえもう帰ろってば。(一香に)もう帰りますから。
女2 (一香を見て)あ。一香さん？ あっ！一香さんだよ、ほら！
男1 えっ嘘。(改めて一香を見て)あ。おー！一香さん？おー！感激！おー！
女2 わー！(一香に握手を求める)すごい。やったー。(握手をして)ありがとうございます…！
女1 ああもう、興奮しちゃって。(二人に)ほら、ご迷惑だっつてば。
女2 だっつてもう、すごい会いたかったんです。うれしー！
一香 ああどうも…
男1 僕らほんとと、零奈さんのご無事を祈ってますから。
女2 はい、ほんとにもう。私たち心配で心配で。
女1 (二人に)うん。じゃあもう帰ろ。(一香に)あ。私たちに出来ることあったら、何でもしますんで。
一香 ああはい、どうも…今後ともよろしく。
男1 はい！だっつてまた一緒に過ごしたいですもん。ね？
女2 うん。ほんと早く見つかって欲しい。また会いたい。
女1 ね、また会いたい。さ、ほら行く。
三人 (帰っていく)
一香 あ、ちょっと待ってちょっと待って。あなた方、母のお知り合いなの？
男1 ああはい。僕らもうずっと、零奈さんにはお世話になって。なあ？
女2 ええ、もうずっと長いこと。
一香 ああごめんなさい、えっと…、
女1 ああすみません。私、零奈さんのセロトニンです。
男1 ドーパミンです。
女2 ノルアドレナリンです。
一香 …え、なに？え？母の。
男1 はい、脳内物質です。
女2 零奈さんとはずっと一緒に、ショッピングしたり遊び歩いたり、
男1 映画を観たり絵を描いたり、
女1 本を読んだり詩を読んだり、
女2 皆んなで美味しいものも食べたねー！
男1・女2 (口々に「食べた食べた」「美味しかった」など盛り上がる)
男2 美味しかったー！フーウッ！(唐突に玄関に続くドアから走り込んでくる。赤いトレーニングウェアにヘッドバンドを巻いた若い男。そのまま舞台を一周し玄関ドアへ去っていく)
女1 ああ副腎髄質ホルモンの、アドレナリンです。
一香 えっ？あっ…、あ…、ちょっと待って。そしたら母は。
男1 はい？
一香 ああいえその、母が今どこだか、分からないんですか？
女2 ああすみません、私たち…、(決まり悪そうに男1と女1を見る)

女1 ずっと一緒だったんです、ずっと一緒だったんですけど…、（同じく女2と男1を見る）
男1 なんかにですね。零奈さん、二、三…、四・五・六年くらい前から、なーんかだんだん、付き合い悪くなっちゃって…。
（ソファに座って二人に）な？
女1 （男1に）でもでも、それでも時々は一緒だったじゃん。（一香に）時々は一緒だったんですけど…
女2 姿が見えなくなるちよっと前に、ほんの一瞬だけ、挨拶を交わして。…で、それからは全然。（ソファに座る）
女1 …：ああ私の何がいけなかったんだろ。私、何かしたかな。ああ…：（自分の頬を激しく叩きながら）ごめんなさい、私、零奈さんに何か、ああ私が、私が、私が！（叩き続ける）
一香 （思わず）あああちよっと、やめてやめてやめて！（その手を取ってなんとか止める）
女1 …：。（手を取られたまま、その手か、一香を見て）育児も一緒にしましたよ。…一香さん、ほんと可愛かった。

少し間。いい感じの音楽、流れ始める。いい感じの照明に変わっていく。

女2 そうそう。十里さんもほんと、可愛くて。
男1 もう最初、こーんなしなくてね。二人とも。
女2 指なんかこんなだよ。もう、くっちやくちやな顔して泣いてたねえ。
女1 抱くとすぐくっついたかいの。もう、あっついくらいにね。
男1 そんなもう、ぐんぐんぐんぐん、大きくなってさ…。
一香 （思わずソファに座って話を聞く）
女2 小学校のほら、何年の時だったかな。一香さん、十里さんの、お尻を花火で。
男1 ああそしたら火い噴いて、こっちの膝がポーンて。いや鼻だったかな。こっちの鼻がポーンってな。
一香 ？
女2 うん。5メートルくらい、いや8メートルくらい？ 空高く。
男1 そんなで「シャチホコ！」ってね。一香さんこーんなね。（なにかポーズ）
女2 あーそうそう。あん時ほら、止まったよね心電図。一回びたっと。止まったね。
一香 え、何それ…え、誰の？
女1 （一香に）で。中学入って。
一香 うん。（次の話を待つも）…で？
女2 あー…（思い出してみるも）中学校のあたりからは、私はもう、一香さんとはあんまり。ごめんなさい。
男1 あー…（思い出してみるも）僕もだ。ごめんなさい。
一香 え。
女2 まあもう好きにやって感じてでしょう、そんなくらいになったら（一香に）ね。そうだったでしょ？零奈さん。
男1 ねえ。そんな。もうあんまり色々。
女1 （一香に）ああほら。二人とも普通に健康だったし、問題も特になくて。ほらそれだけで、もう充分。
女2 うんうん。それより他に色々ね、
男1 そうそう。忙しかったしね。美味しいもの食べに新幹線乗ってばびゅんとほら！
女2 行った行った！
一香 あ、ああそう…。
女1 （一香に）あつても私はずーっと一緒でしたよ。ほら、駄目な子ほど可愛いつていう…ほら一香さん、ね？ほら
男1 うんうん。あー…また会いたいな…。
女2 遊び倒したいよね…、派手に。
男1 ああそうだ！あれあれ。サプライズパーティー！
女2 ああ！あれは毎年、ワクワクしたね。
一香 あっ！

男1 うんうん、年に一度のね。お楽しみ。
女2 嬉しかった！最高！

茜、玄関に続くドアからやって来る。

茜 あ。…何？この音楽。

一香 ああ茜ちゃん。

茜 一香さん、十里さんたち見ませんでしたか？（と、一香の近くへ駆け寄り）

一香 え？

茜 ん？一香さん、…ここんどこ。穴が開いています。（一香のコメカミか頭のどこかを指す）

一香 え？

茜 （そこをよく見て、手で塞いでみる。すると音楽、ピタリとやむ）あ。

男1 しかしどこ行っちゃったんだろうな、零奈さん。僕らを置いて。

女2 （立ち上がり）じゃ。もちよと探してみよっか。きつとまたどこかで、ポーツとしてるから（笑）

男1 （立ち上がり）だね。きつとまた暗い部屋で、こーんな風に（膝を抱えて）、一人でポーツとしてるかも（笑）

女1 （立ち上がって一香に）じゃ私たちはこれで。お邪魔しました。

茜 （手を離してみる。別の音楽が鳴り始める）

女2 でもその前に。甘いものでも食べて〜？

男1 食べてく食べてく！

ぶら下がった零奈、やたらチカチカ光る。しかし三人は騒いで、玄関に続くドアへ去っていく。

一香 （3人を追って）あっ待って。私も一緒に…

茜 （一香の手を取って止めて）何なんですか、これ。どうなってるんですか。

一香 え？ああもう。さっき叩かれた所だ。（頭に手を近づけたり離したりすると音楽が小さくなったり大きくなったり）

茜 （それを見ていたが思い出し）ああ、そんなことより十里さんたち、

一香 （掴まれた手を振り払い）もう知らないよ！そんなん。その辺にいますでしょう。あ、ほら。（玄関に続くドアを指す）

音楽のまま十里と千紘、やって来るが、どちらも衣装は同じながらも明らかな別人。（※配役も別人）

千紘 （ドアを蹴破って）なんだよ、もう父さん来ないってどういうことだよ。（少年ではなく立派な青年）

十里 どうもこうも二度と来ないのさ。せいせいするだろっ？あんな男。（仕事や身のこなしがまるで違う）

千紘 はっ（格好良く唾を吐き）俺に黙って勝手なことすんじゃねえよ…！

十里 ああうるさい。（たおやかに座り）姉さん、何とか言ってくれ。

茜 え？千紘くん？え？どしたの？

千紘 ああ、声変わりだよ。

茜 声変わり？（解せない）じゃあ十里さんは、

十里 更年期だよ。

茜 更年期？（解せない）

千紘 まったく信じられないよ、もうやってらんねえよ！（テーブルを蹴るなど）

一香 あ。あんまりうるさくするとまたほらあの、塩昆布が。（奥のドアを指し）塩昆布がほら、

十里 塩昆布？

千紘 こんなところ、俺、出てくからな。もうお前らなんかと暮らせるか！

秋野 (奥のドアを開け、鬼の形相で出て来る) もういい加減にしてくださいよ!

茜 あっ：(思わず一香の後ろに逃げる)

一香 ほらもう！(と言つとポケットから銃を出し秋野を撃つ)

秋野 (吹っ飛んでドアの向こうに倒れる)

一香 どうもすみませんでした。どうぞ永遠にお眠りになって下さいな。

千紘 :なんだよそれ、どうしたんだよ、

茜 (思わず秋野を見に奥のドアに駆け寄る)

一香 え？ああさっき外にいた警官さんのを。(千紘に銃を向け) はい、あなたも部屋に戻って。

十里 (高らかに笑つて) ほら見る！いい気なるんじゃないよ。そんなことだからあなたはね・

一香 (食い気味に十里に対して銃乱射)

千紘・茜 (※千紘はそれから身を守る時に洗面所のドアを開け、茜は奥のドアを開ける形になる。映写時状態準備)

十里 (乱射の全てを身軽にかわす)

(※実際は日本警察の拳銃は5発装填だが8発か10発装填でいきたい)

一香 あなたも大人しくしてよ、忙しいんだから！(十里に銃を向けたまま)

茜 あ、茜ちゃん、(テーブルを顎で差し) ごめん、それ取って。早く設置しなくちゃ。

茜 あ、はい、(ドアノブを取りに行く)

一香 あーあとこの後始末と表の掃除と、ああ、ゴミ置き場に張り紙もしなきゃ。だからほらみんな、手伝ってよ！

茜 (ドアノブを見ながら) あ、あの、ゲイブですか、ヤコブですか？それともギユスターブ、

一香 (茜の足元に数発発砲) なんでもいいから早くして！

千紘 何だよ、もう出てってやる…！(と、玄関に続くドアへ走り去る)

十里 あっ千紘、待って！(それを追って走り去っていく)

一香 あっちょっとなに？(と、銃口を咥え) 手伝ってくれなきゃ撃っちゃうよ、ねえ、ねえ、(走り去っていく)

三人が去ると同時に、大きめの電気音で、照明が一旦真っ暗になり、大きく揺れる。そして治まる。

一人残された茜、それを感じたあと少しの間を置いて、映像イン。映像の不穏さに慄き、逃げ去っていく。

FILM ムーブメント

両目から夥しい電気を放つ葦、下からフレームイン。その口は「茜」と呼びかける。(津軽弁でエフェクト強め)
荒い鼻息から電流が漏れ出し、激しく咳込むと、そこから激しく電流が飛び散る。

葦 茜、戻って来い。そろそろお前が発電せねばなんね。お前が発電せねば、世界は闇に包まれる…。おらはもう…

葦、咳込みながら激しく光って、やがて電流になる。そしてそのまま、送電線に吸い込まれていく。

その電流が送電線を進んで草原から街へ向かう。

映像乱れる。乱れつつ、ニュース番組へ。背景に「Tainia」ロゴ。キャスターの胸に「Tainia」バッヂ。

女キャスター 只今、電圧が乱れております。大変申し訳ありません。

男キャスター 東京都下水道局・水再生センターの下水処理場から、細かく溶け出した男達が大量発生しています。

処理場から次々と走り出てくる五朗たち。嬉々としてパチンコ屋、競馬場、公園等々へ。

男キャスター

さて万零奈さんの失踪から明日でちょうど、50日。未だ有力な手掛かりはありませんが、捜索打ち切りの指示などは一切出さず、今日も懸命の捜索活動が続いています。

また、明日の決起集会の準備が各地で…

」50」のロゴが大きく出たところで爆音。映像乱れて消える。街の様子。(下北沢駅前)

1 「探さないで!」「NO!!捜索」「探しちゃ駄目!」とボール紙に書いたプラカードを掲げる人達。シュプレヒコール。女、拡声器で「零奈さんは探されたくないんです! 放っておいてあげて下さい!」男「探すな!」火炎瓶投げる。

2 「零奈は捏造!」「NO!!零奈」「そもそも居ない!」「騙されないで!」と同じく掲げる人たち。シュプレヒコール。男、拡声器で「万家と捜索隊はCIAでユダヤでイルミナティでレプティリアンだ!」女「全部嘘だから!」など。

3 「私が零奈だ!」「I am 零奈」「そういえば私が零奈でした」「零奈はここに居ます!」と同様。シュプレヒコール。女「私はここに居ます!」男「俺が零奈だ!」女「黙っててごめんなさい!私が零奈なんです!」など。
老若男女が主張し、そのうち喧嘩に。

その喧嘩に他団体が混じり、乱闘になって、音楽はそのまま、舞台上に照明。映像オフ。

テナント 陰謀論・開店1 (二香・十里) F号室/B号室/C号室/G号室

音楽のまま、ドアは映像パネル状態のまま、不安定な照明の中、夏希、「零奈は捏造」と書いたプラカードを持って、玄関に続くドアから声をあげてやって来る。中年男性も同じくプラカード持って客席出入口からやって来る。F号室。

夏希 (シュプレヒコール) 私たちは騙されない、私たちは騙されない。

男性 (客席に) ほら一緒に!

夏希 私たちは騙されない、私たちは騙されない。

男性 (客席に) 声出して!

夏希 (客席に) 皆さん! よく集まってくれました。我々は真実に、目覚めた!

男性 目覚めた!

夏希 目覚めた!

男性 目覚めた!

夏希 零奈なんて居ない。最初っから。どこにも居ないんです。それをもっと多くの人に知らしめていきましょう。せーの、

零奈は捏造! 零奈は捏造! (繰り返し)

男性 ほら。大丈夫。声をあげて。(など)

そこに一香が機関銃を乱射しながら、玄関に続くドアからやって来る。
そして頭の穴を絆創膏で塞ぐ。音楽オフ。

一香 何してんですか! 出っ行って下さい!

夏希 あ。(客の一人に) ほら! 零奈なんかどこにも居ないって、言ってやって。

男性 (その客に) 言ってやって!

夏希 (少しの間のおと客席に) : ほら! 居ないでしょ? どこにも。最初から。ね?

男性 (一香に) そう! 全部あんたらの捏造だ。あとCIAとユダヤと、色々だ!

夏希 (一香に向かって歌う) 私たちは騙されない!

一香 えっちょっと夏希さん? F号室で何やってんの? ここ劇場だよ?

夏希 何って。真実に目覚めた者たちの、会合だよ。

一香 (プラカードを見て) でも夏希さん、会った事あるじゃん。

夏希 え？

一香 母さんに。何度も。

男性 (夏希を見る)

夏希 ああ……。 (真顔で) なんかね、すごい儲かるの。

一香 ……え？

夏希 だから今度奢るよ。皆んなで行こ。ナベノイズムのフレンチでもエネコ東京のバスク料理でも。

一香 (夏希と男性を見て) え？

夏希 赤坂菊乃井の和食も良いよね。絶品。最高。あ、それで旅行も行こう。クルージングで世界一周 (壊れた様子)

一香 え、何何？

夏希 (笑いながら) いやもう賛同者の寄付金がバンツバン入るから。もうバカみたいにバンツバン。あ。だからほら。

あれも私が…。えっと、「零奈を探すな運動」と、「私が零奈だ運動」。

一香 ……え？ (考えてから) それも、夏希さんが…？

夏希 うん全部、私が首謀者。

男性 (プラカードを落とすなど)

一香 (それを見て) ……でもいいの？

夏希 え？

一香 言っちゃって。それ… (中年男性を見る)

夏希 ああ。(笑って) なんか炎上したら、それはそれでまた。したらなんかまた美味しいもん食べよ。

男性 ああああああ： (声を漏らし震えながらポケットからカッターナイフを取り出す)

夏希 あ。ごめん。じゃ、ちょっと動画撮るから。(ポケットからスマホを出す)

男性 あああああああ…！ (夏希に襲い掛かる)

夏希 (自撮りしながらドアに去っていく) いやあああ助けて殺されるー。あはははは。殺されるー。

一香 え、ちょっと夏希さん、大丈夫なんですかー?! ちょっと、

玄関に続くドアから去っていく。入れ違いに、茜やって来る。

一香 わあびっくりした。

茜 あ、ごめんなさい。

一香 ああもう。茜ちゃん。(機関銃を茜に向けて) 家賃。用意出来た？

茜 (銀色の丸い物体がゴロゴロと入った瓶詰めを一香に渡し) はい。とりあえずこれだけでいいですか。

一香 (受け取って) え、何これ？

茜 ごめんなさい。とりあえずしばらくは、プルトニウム払いをお願いします。

一香 え？

茜 なんかわら今、景気もあんまり良くなって。だから女の仕事がまたちょっと。

一香 あー。(瓶を見て、振る)

茜 でもこんだけあれば、爆心地から2kmは壊滅しますんで。

一香 えっ、

茜 あ。気をつけて下さい。振動や火気で臨界状態になったらもう。

一香 えー？

照明、短い電気音と共にチカッと変化する。

茜 (上に向かって) ああもう婆ちゃんうるさい。絶対帰らないから。(照明戻る) じゃ、とりあえずそれでお願います!
(と、玄関に続くドアに走り去っていく)

一香 あっ。ちょっとこれやだ。持ってって。(と、玄関に続くドアに走り去る)

茜、プルトニウムの入った更に大きな瓶を持って、玄関に続くドアから入って来る。上手梱へ。

そしてプルトニウムを握って作り出す。大きい瓶にそれを詰めていく。G号室。

一香、玄関に続くドアからやって来て言う。瓶詰めは持ったまま。機関銃はなし。C号室。

一香 ねえ、十里いる? ちょっとこれどうにかして……。

同時に玄関ドアから見知らぬ爺さん(あだ名IIアシカ) やって来る。

アシカ おうっ。(と、片手を上げる)

一香 えっ誰?

アシカ (一香の尻を撫でる)

一香 えっなに? 誰。

奥のドアから十里(元の。更年期ではない方)と二葉、ラーメン屋らしい衣装でやって来る。
以降、C号室。

十里 へいらっしやい!

二葉 へいらっしやい!

アシカ 背脂煮干しワントン麺ね。

十里 へい背脂煮干しワントン一丁〜!(語尾伸ばし半音上がり)

二葉 背脂煮干しワントン一丁〜!(語尾伸ばし半音上がり) ※ドアを映写状態から零奈の見える通常状態に戻しながら

一香 え? 十里? 何やってんの?

十里 ああ一香。ここあれよ。テナントにしたからよ。

一香 テナント?

十里 ラーメン二葉。あとここ以外にも、三つ葉四つ葉五つ葉六つ葉と、あー、七十七葉まで。チェーン展開始めたからよ。

二葉 (凄い勢いで湯切りをする)

一香 は?

セイウ おうっ。(爺さん。玄関に続くドアからやって来る。とても線が細く、か細い声。あだ名IIセイウチ)

十里 へいらっしやい!

二葉 へいらっしやい!

一香 ……なんだそれ。いつの間に?

二葉 来月にはロスとバリとバルセロナにも出店するよ。

十里 するよ〜!

セイウ 背脂煮干しラーメン麺ね。

十里 へい背脂煮干しつけ麺一丁〜!

二葉 背脂煮干しつけ麺一丁〜!

一香 つか更年期は?

十里 ああもうなんか全然、調子よくなっちゃったよね。(凄い勢いで湯切りをする) あ。あとついでに他の部屋、

入居者入れたから。ほとんど全部ね。

一香 え。

十里 だからよろしくうー！（そしてアシカにラーメンを出す）へい背脂煮干しワンタンお待ちい！

二葉 お待ちい！

一香 なにそれ勝手に、

十里 だからあんたよろしくね。

一香 やだよ、やだって言ってんじやん！（瓶詰めを思い切り振る）

茜 **（それを見て）あっ…！**

十里 ほら邪魔だよ。（セイウチにラーメンを出す）へい背脂煮干しつけ麵お待ちい！

二葉 お待ちい！（湯切りザルを一香の頭にくつつける）

一香 あ。熱っ、熱っ、（瓶詰めを落としそうになってポンポン投げる）

茜 **あっ、あっ、（思わず拾いに行く）**

一香以外 **（一香を見て笑う）**

十里 私時間ないからね。とてもじゃないけど。

一香 なんだよ！大家なんかやりたくないって言ってんじやん！（と、瓶詰めを投げ、或いは転がし、玄関ドアに走り去る）

茜 **（それをキャッチしてほっとする。その後自分の瓶の横にそれを置く）**

十里 あ、セイウっちゃん、セイウっちゃん。今日はチャーシューいいの？いらなの？

セイウ ああ今日はもうこれで腹いっぱいだよ。

アシカ なんだよセイウっちゃん、情けないねえ。こいつさ、昔はこーんな巨漢だったんだよ。で、こーんなロン毛でこころで毎晩イエイイエイな。

セイウ アシカっちゃんもういいよ、その話は。

二葉 えく何何、聞きたい。

一香、玄関に続くドアから入ってくる。B号室。

アシカ **（アシカのように笑い）** いやいや凄かったんだって。すごい匂いでね。もう百メートル先でも分かったね。

十里 へー、そりや嗅ぎたかったね。

一香 **もうやだよ…なんで私ばかり…。**

茜 **（一香を見る）**

セイウ 昔の話だからやめてよもー。

一香 **私ばかり一人でこーんな、**

十里 **いいじゃん聞きたいじゃん。**（二葉に）ねー。

一香 **一人でこーんな、寂しいじゃん…！**（泣き出し、ソファに座る）

一香の「寂しいじゃん」をキッカケに、十里と二葉とアシカとセイウチ、一斉に動き出す。

以降、一香を皆で取り囲み、揉みくちやにするように、動きながら話す。

セイウ やめてってばよ。（立ち上がり）

アシカ いやいやこいつ純情でさ、（一香の肩を抱き）

十里 なになに？（一香を背後から抱き）

一香 **寂しいんだよ…、**

アシカ 恋しちゃった時なんかさ、ほら何だっけ…何だっけな…

二葉 えーなになに？聞きたいー（一香を横から抱き）

セイウ やめるってばよー（笑う）

一香 (話を続ける四人に揉みくちやにされながら) あー寂しいよー！
 茜 (思わず一香に) あっあの、全然寂しくなさそうな状態ですから、
 一香 (揉みくちやにされながら) あー寂しいよー！寂しいよー！
 茜 (一香に) ああ更に寂しくなさそうです、ねえほら！
 一香 (泣き続ける)
 茜 (一香に) ああほらもう見て。見ちゃってよ。見るよ！
 アシカ ああほら、あれだ！レナウンちゃんだ。
 十里 (驚きアシカを見る)
 一香 え？なになに？なにそれ？
 一香 (じくしく泣く)
 アシカ いや、こいつ昔ここ住んでたのよ。レナウンちゃんとき、ここに転がり込んで。
 十里 レナウンちゃん？
 アシカ ああいたのよ、そんなのが。ほんでそのうち娘なんかまさ、ほら何人だったっけ？
 セイウ あ？何人だったっけな。
 アシカ まあ何人か居たのよ。なのにこいつふらふらしてはっかだよ。
 セイウ やめるってばよ…。(たまたま一香を抱き締めるような体勢になる)
 二葉 あ。はい！(と一旦、奥のドアへ)
 茜 一香さん、その人…。
 一香 (棚の方へ歩き出す)
 アシカ で。そのうちまたどっかに消えちゃってさ。ふらふらとよ。
 茜 見て見て、この人…！
 一香 (棚の下の方から、首吊りの形のロープを取り出す)
 茜 え。一香さん、何それ。
 二葉 (奥のドアから声を掛ける) 十里ちゃん、仕入れ来た。
 十里 あ、じゃあごめん。どんぶり下げといてー。(とアシカとセイウチに言うと、奥のドアへ急いで去る)
 アシカ はいよっ。
 一香 (ロープを掲げる)
 アシカ じゃ行こうかセイウっちやん。
 セイウ ああ。(玄関に続くドアへ)
 アシカ プールサイドにふんふん♪(玄関に続くドアへ)
 一香 (ロープを見つめ続ける)
 茜 一香さん、ちょっとやめて。(と、一香の背中や頭を叩く) やめてって…！(もっと叩く) ほら！おい！
 一香 (微動だにしない)
 茜 ああもう、わかりました、わかりましたよ…！(玄関に続くドアに走り去る)

茜、玄関に続くドアへ去っていく。

新入居者 **ロデオ・新入居者・解脱** (一香・春奈・夏希) **B号室・ウツシロ号室・オメガ号室・D号室**

一香、ため息をついてロープをいったん置くと、棚からテンガロンハットを取って被り、額の絆創膏を外す。すると陽気なカントリー音楽が流れ出す。音楽に乗って声をあげ、ロープを投げ縄のように激しく振り回す。B号室。

一香 (上)に回し(フー！)下)に回し(フー！)上)に回し(フー！)上)に回し(フー！)そのままと回し続ける
 茜 (急いで玄関に続くドアからやって来る) 一香さん…！

一香 …。(茜を見たまま回す)
茜 …え、何やってんですか？(そして一香の額に絆創膏を貼る。音楽やむ)
一香 あ。

奥のドアから馬がやって来る。

茜 …。(馬を見る)

馬 …。(茜を見たまま一香の元へ)

一香 え？なに。どうしたの茜ちゃん。

茜 え？

一香 ああ、まだドア直ってないけど、一応ほら、プライバシーがあるから。だから入る時には、ノックしてね。(そしてロープを捨て、馬にまたがり、片手をあげる)

茜 あ…。ロデオですか。

一香 (片手を上げたままびしゃりと)：プライバシー。

茜 あ。ああ。ごめんなさい。

一香・馬 (一声上げて、ロデオを始める。足は固定で上半身のみ激しく)

茜 …：ああ。なんかごめんなさい。じゃあ、失礼しました。

一香 あっそうだそうだ。(ロデオをやめ馬から降りて)どうどう。(と馬を撫でると)なんかここ、ほとんど全室、満員になったみたいだよ。

茜 え？

一香 だからなんだ。多分、百人以上はいるいるから。住人。

茜 え？

一香 ここに。今。(辺りを指差す)

茜 え…？(思わず辺りを見回す)

一香 違ったがえしてるよ。(或いは「ひしめき合ってるよ」)

茜 えっ？(思わず辺りの空気を触ってみる。しかし何も触らない)

一香 (笑って)何やってんの。大丈夫だから。気にしないでいれば。

茜 ああ…？(目を細めて辺りを見回す)

一香 だいぶ慣れてきたみたいだね。

馬 (茜の方へ近づいていく)ぶるるる。

一香 あ、よかったらそれ貸すから。(ロープを手に取る)

茜 いやいいです。

馬 (茜の方へ走っていく)ぶるるるる。

茜 (ロープを指し)あっ！変な気は起こさないで下さいね。

一香 え？(ロープを見る)

馬 わああああ！(玄関に続くドアへ逃げ去っていく)

馬 (追っていく)

一香 ……………。(ロープをまじまじと見つめていたが、あ、と思ってそれを首吊りの方向に向け、ゆっくりと顔に近づける)

ドアノック音。玄関に続くドアから、百十里と六朗がやって来る。

百十里は過剰に可愛くふるまう、若い女性。可愛い服。六朗は過剰に優しそうな、爽やか好青年。

百十里 あ、ごめんなさい。私たち、今度ここに越してきた者なんですけどん。(六朗に)ほら。

六朗 ああ。どうも。

百十里 よかったらこれ。(小さい土産を渡す)

一香 ああ別にいいのにこんな。(ロープを置き、受け取って)

百十里 よろしくお願ひしますん。私、万田百十里です。(六朗にピッタリ寄り添う)

六朗 ははは。(中身の無い明るい笑い)

百十里 まだ学生なんですけど。でも私はこないだ不動産会社に就職決まったんで。

一香 あ、そう…

百十里 あ。業界最大手のミツイです。その資産運用部の営業で。私がこれから、バリバリやるんで。(六朗に) ね？

一香 え：(百十里の顔をよく見る)

百十里 (そんな一香に対し) あ、趣味はクライミングですん！

一香 ？！

六朗 ははは。(中身の無い明るい笑い)

百十里 あ、六朗とは今度籍入れますけど、子供は作りませんから。(六朗に) ね？

六朗 ははは。うんそうだね。(中身の無い明るい返事)

一香 あー：(思わず六朗をよくよく観察)

百十里 だからもう家賃なんかは全然：(急に不安になる) えっ？大丈夫かな、私、やってけるかな、

六朗 (軽薄に笑いながら) ああもうそんなの全然、大丈夫っしょ！

百十里 んもう、六ちゃんのことということが好き。

六朗 お前ならやれるってー。(そしていちやつぎです)

一香 (いちやつく二人を見て) …：へー。

百十里 どうしました？

一香 いや。：なんか凄くよく似た人、知ってるもんで。こんなだったのかなって。二人だけの時…。

百十里 え？

六朗 (百十里の尻を触っている)

百十里 やだもう六ちゃんっ。(いちやつぎです)

六朗 百一香ちゃん、(など、いちやつぎ続けて)

一香 …：うわあ…。

百十里 (六朗に抱きついたまま) あ。じゃ。今後よろしくですん。

六朗 じゃ。

と、そそくさと玄関に続くドアに二人去っていくと同時に、百一香、やって来る。小一くらい。

百一香 (上に向かって唾を吐き、顔を拭う。笑う。また上に向かって唾を吐き、顔を拭う。笑う)

一香 え…。

百零奈 ああごめんくださ：(大きなサングラスを掛けた奥さん。後ろにかかったカーテン柄に似たワンピース)

百一香 (奇声をあげて駆け回る)

百零奈 ああもう、百一香！百一香！

一香 えっ、(百一香を見る)

百一香 (百零奈のもとへ)

百零奈 ごめんなさいね。ほんとこの子はダメな子で。下の子はもうさ、凄くしっかりしてんだけどねえ。

一香 (百一香を見て) …：はあ。

百一香 ポンバイエ、ポンバイエ、(と小さく呟きながら、またウロウロします)

百零奈 ああこれ。(土産を差し出す) こないだ凄く美味しかったやつ。あげる。

一香 ああ。

百零奈 食べてみてー。もうほんと美味しいからーすごく美味しい！(脳内物質等と似た仕草) ね？絶対よ。絶対食べて。

一香 (受け取って、百零奈をよく見る) ……。

百零奈 どしたの？

一香 いえ……………(百零奈から目が離せない)

百一香 猪木ですかっ！(と、一香の尻に指洗腸)

一香 あっつ…！

百零奈 (ツボったらしく笑ってから) 百一香、百一香！もう。あ。私、万野百零奈。こないだここに、入ったから。

一香 あ…。

百零奈 よろしく哀愁。じゃ。

百零奈と百一香が玄関に続くドアから退場すると同時に、百十里と六朗。いちゃつきながら入って来る。その後、百零奈と百一香も玄関に続くドアから入って来る。ウブシロン号室と、オメガ号室。

一香 ……………。(呆然と座る)

百十里 やだもう、ちょっと。(一香のすぐ背後で)

六朗 なんて、いいじゃん。(一香のすぐ背後で)

百十里 ゴムあんの？ゴム。ちゃんとしたやつー。

百一香 (奇声をあげて、一香の周りを駆け回る)

百零奈 挨拶も出来ないなんて。あなたは何やらせてもほんとダメだね(一香の隣で煙草啜る)

百十里 もうダメだって。出来ちゃったらどうすんの？

六朗 えっそしたら俺、男の子がいいなあー。

百十里 え〜？

一香 ……。(声が聞こえてきている？とても気になるも、両手で耳を塞ぐ)

百零奈 (ライターの火は延々つかない)

百一香 (奥の部屋から大きなダイナマイトか爆弾を持ってきて火のつくのを待つ)

百零奈 あっあんた何それ、ダイナマイトじゃん。こちら一体焼き払う気？

一香 ……！(声が聞こえている？とても気になるも、ぎゅっと目を塞ぐ)

そこに茜が馬の格好でパカラッパカラッと、玄関ドアから走って来る。

茜 あれ？なんで私が馬？え？なんで？ ねえ一香さん、見て見て！ なんて馬？

一香 (目をぎゅっと瞑ったまま、両手で両耳を細かく叩くなど) あーもう何これ…

茜 一香さん、見て見て聞いて！ ほら！

一香 (目と耳から手を離し、茜をチラ見) ああなにこれ…！

茜 ぶるるる。

百十里 **じゃ、ベッド行こ。ベッド。(奥の部屋へ)**

百零奈 ああ。寝室にマッチがあっただかな。(奥の部屋へ)

茜 なんてー。(玄関に続くドアへ)

百一香 **(ダイナマイトを上手の棚の瓶詰めの横に置き、奥の部屋へ)**

一香以外、全員去っていく。耳を塞いで目を閉じたままの一香、一人残される。間。恐る恐る目を開け、耳から手を離す。無音。零奈の存在感。

一香 ……………。(ロープを持って、玄関に続くドアへ急ぎ去っていく)

一香が去ると夏希、首に包帯を巻いて、玄関に続くドアからやって来る。以降、D号室。

夏希 (スマホ弄りつつ) はーやったね。ほら、フォオアーもうすぐ億超え。世界ランキング入るよー。あーもー死にかけた甲斐あったよー。あ。ついでに修理してもらったよー。(一息ついて辺りを見回し) あれ？春奈……？春奈ちゃん？
ただいまー。ごめんね、ずっと留守にしてー。

奥のドアがゆっくりと開く。

夏希 あっごめんね！ずっと一人に、して…

春奈、大仏像の様相。頭と顔と衣装が完全に大仏像。枕を持っている。

春奈 ……。あー。やっと帰ってきた。

夏希 え……

春奈 もう。すっごい心配したよ？連絡くらいしてよ。なんなの？(枕で夏希を何度も叩きだす)

夏希 え……？ごめんごめん、なんか私、壊れてて……(ところでその風貌は……と思ったまま)

春奈 あのね、私すっごく寂しかったの！ずっと寂しかったの……！！(また叩く)

夏希 え。でもだって、春奈わたしのことウザがってたじゃん。(叩かれ)ちょっと、

春奈 でもさ、こんなの酷くない？私、ずっと寂しくて！苦しかったの！自分が、自分がこんな風になるなんて……

夏希 ああごめんって……(ところでその風貌は……と思ったまま)

春奈 あとね、すっごく、妬ましかったよ？憎かったよ？……もう、殺してやりたいくらい。

夏希 え。

春奈 だって一人でバリバリ活躍してちゃってさ、すごいイキキしちゃってさ。そんなんずるいよ……

夏希 春奈ちゃん……

春奈 私なんか何も出来ないのに！ずるいずるいずるいずるい……(地団駄踏むように暴れる)

夏希 そんな、ちょっと、いいんだよ。春奈ちゃんは。そのまんまでさ……ねえ(と、暴れる春奈を支えるか、抱き止めようとするが)

春奈 ……。それを無言でキツパリと断る。そして静かに……はい。でももう、そうしたのは、大丈夫になりました。

夏希 ？

春奈 そういったものは、もうすっぴつ。

夏希 ……え？

春奈 あんまり帰ってこないから、その間にもう。本当に。(大仏の顔で夏希を見る)だからもう何も必要ないから。

夏希 ……え？

春奈 だからもう、勝手にしていいよ。これでやっと、ちゃんと眠れる。(枕をして寝転がる)……おやすみなさい。

夏希 え？

春奈 さよつなら。(そして淫靡)

夏希 ……え。寝ちゃったの？……ちょっと！(激しく揺さぶってみる。叩いてみる)

しかし春奈起きず、照明が春奈を優しく包み込み、鳥の声など聞こえず。

夏希 (それに対し) え？……………。(しばし考えてから、その前に座り、春奈を拝んでみる)

煌びやかな音で、照明煌めく。夏希が傍らに置いたスマホが、ブーと通知音を出す。

夏希 (スマホを見る) あ。地球温暖化が止まった。(春奈を見る。そしてもう一度、拜んでみる。同じ音と照明。ブー。スマホを見る) あ。世界各地を見る) あ。国内外の景気が良くなった。(そしてもう一度、拜んでみる。同じ音と照明。ブー。スマホを見る) あ。世界各地の戦争と紛争が全部終わった。(春奈を見て) ……。え？何これ。え？

昇天 資格・昇天一 (一香) D号室/B号室/A号室？

D号室では春奈は寝たまま。夏希は春奈を起こそうとしたり、おろおろしたまま。

一香、真っ赤な口紅を塗り、頭に大きなリボンをつけ、スカートに履き替え、玄関ドアからやって来る。

メイクボックスを持っている。その後ろから茜、着いてくる。B号室。

一香 ほら！なんか知らないけど今、急に景気が良くなったから。世界情勢も安定したし。だから今がチャンス。

茜 ああ、

一香 取るよ、私も。女の資格。そこでここ、出てくから。そこで人生、変えるから、

茜 ああ…。

一香 茜ちゃんもほら、今のうちに稼がないと。急いで！。(メイクボックスをテーブルに置き)

茜 あ、はい…。

一香 ツケマツケマ…(と、メイクボックスを探る)

千紘(すっかり成長した姿。五朗に瓜二つ)が、玄関に続くドアからやって来る。鞆持って。

千紘 え。何してんの？

茜 あっ…！

一香 (茜にメイクボックスを放り投げ) 探しといてね。一番長いやつ。(千紘に) なに五朗さん、どしたの。

千紘 あ、いや…(一香の顔を見て) 何してんの？

茜の所だけ、激しく照明変化開始。

茜 ああもう婆ちゃん、見えない。やめてもう。(メイクボックスを漁る)

千紘 (茜に) 何してんの？

茜 (メイクボックスを漁り続ける)

一香 なに五朗さん。今忙しいから…

千紘 (遮って) あ。いや俺、千紘。千紘です。

一香・茜 えっ。

千紘 ああ、先日エイブルに、就職が決まりました。

一香 え。嘘。もうこんなに成長したの？え？年は？えっいくつになったの？

千紘 そんなことよりなんかウチ、ラーメン屋になってんですけど…

一香 (後ろからも見てみる) え？五朗さんじゃないの？五朗さんでしょ？

シーン「入居日」の作業員、玄関に続くドアからやって来る。D号室の夏希は一旦、奥の部屋に下がる。

作業員 失礼します、脊髓ハウスリノベーションで（す。と千紘を見て）おおっなんだ！千紘くんじゃないか。ちょっと見ない内に随分と大きくなったな。

一香 え。

作業員 もうすっかり大人だ。

千紘 （てへへと頭を掻く）

一香 ……。 （千紘をまじまじと見る）

作業員 （一香に）あー電圧異常の点検です。ほら。おかしいでしょ？電圧。

一香 …あ、はい。 （茜の辺りだけ照明が激しく変化しているのを見る）

作業員 （工具箱の中を弄りつつ）いやこの周辺の電圧はね、下がってるんですよ、どんどん。でもこの電圧だけがね異常に上がってましてね。ぐんぐん。

一香 はあ。

作業員 （千紘に）でほら、漏電。してたでしょ？ここ。だから危ないんでね。

茜 （メイクボックスを放り投げる）

一香 え。ないの？じゃあいいや。ほら練習するよ。

茜 ああはい…、

一香 （作業員に）あ、今から女の練習するんで。点検勝手にどうぞ（茜に）じゃよろしく。

頭の絆創膏を剥がす。過剰にポップで可愛い音楽イン。

茜 （メイクボックスからぬいぐるみを取り出し、一香に見せてみる）はい。

一香 きゃー。くあんわいいい〜。 （そして自分の胸を掴んでぐるんぐるん回して突進）

千紘 え、一香さん。何してんですか。

一香 ……。 （千紘を睨むと、千紘に向かって座り、スカートを捲って大きく開脚する）

千紘 （スカートの中を見て）うわああああ！と、飛び退いた後）売女雌豚クソビッチ！

作業員 （スカートの中を見てから慌ててスカートを直し）何やってんの！ほらやめて下さい。 （一香のおでこに絆創膏。音楽オフ）

一香 （抵抗してまたスカートを捲ろうとするも）

作業員 （なんとかスカートを押さえながら）いやちょっと！こんなんね、全然、女らしくも可愛くも、セクシーでもないですから！

一香 （手が止まる。驚愕）うそ…！（そして自分の股間を押さえ、自分の股間と作業員を交互に見て）うそ…、

夏希、袈裟や数珠などをしっかりと身につけた状態で、D号室に戻って来る。

一香 ……………。 （崩れ落ち、地面を叩くなど）

作業員 いやあの。そんな。ごめんなさい。

一香 ……………。 （地面に突っ伏し嗚咽を漏らすしか出来ない）

作業員 あ、ほら。 （先ほどのぬいぐるみを見せるなどしてみる）……。……。……。

夏希 （朗々とお経を唱え出す）

茜 （夏希を見て）あ。

すると馬が、干支をすらりと引き連れて、敵かにやって来る。

（※干支の動物のぬいぐるみ等を、広げた両腕にすらりとぶら下げている）

茜 あ、何あれ…。

千紘 え？

茜 (ぬいぐるみを数え) ねーうしとらうーたつみー、馬…。あ。干支。
千紘 えと？

春奈を干支が取り囲む。その横で夏希がお経を唱える。美しい構図に。

茜 あ。涅槃図。
千紘 ねはんず？

するとお経に合わせて春奈、ゆっくりと起き上がり、昇天の舞いを厳かに踊り出す。

茜 あああっ…昇天の舞いだ…。
千紘 え、なに？
茜 昇天の舞いが…。春奈さんが昇天を…。

夏希、春奈、馬、声を合わせてお経を唱える。春奈、眩く光る。

そしてお経が終わると、音楽イン。その光が一気に、その後ろの零奈に向かう。零奈、眩く光りだす。

春奈、零奈に視線を移す。春奈と夏希と馬の零奈を吊り舞い、軽快に始まる。作業員は計測器の異常に気づく。

作業員 :あれ？(計測器を見て) 電圧が上がっています。

千紘 え？

作業員 この電圧が急激に、

茜 (春奈らを見たまま) ああ…一香さんっ、一香さんっ、

作業員 漏電してます、凄い量の漏電です、

茜 (春奈らを見たまま) ねえ見てください:あれ:

千紘 ああ…なんかビリビリする、

茜 ほら見てってば。(一香を叩くなど) 見て見て見て…!

一香 (抵抗。強く耳を塞ぐ)

茜 零奈さんです！零奈さんがほら…!! (零奈を見る)

更に眩く光る零奈。盛り上がっていく吊いの舞い。

零奈と一香に優しい笑顔を向けて、舞いは続く。零奈がどんどん光っていく。

茜 ああああ…見ないと。これは見ないと…!

一香 (無視)

茜 (気づいて) ああっほら！四十九日です!

一香 (両手で耳を塞いだまま) あ—————。

茜 (一香の両手を掴んで、なんとか引き剥がそうとする)

作業員 ああ凄い電圧がここを直指して、なんか近づいています…!

千紘 え?なんで?

作業員 ほらごんごん、近づいて…

千紘 ここに?

作業員 このままだと引火します。

千紘 なに?

作業員 建物に引火します…!

茜 もっつ…！ごっつして見ない…!

一香 (絶対抵抗)

茜 (一香を思い切り蹴り飛ばす) 見るよー…!

一香、思い切り転がされる。作業員と千紘、春奈と夏希と馬も舞いを止めて、全員が思わず一香を見る。

一香 ……………。

一香、仁王立ちに立ち上がり正面を向いて、何を言っかと思いきや、渾身の力できつぱりと言っ。

一香 いやだあああああー。

少しの間。

作業員 (計測器を見て) あっ。逃げましょう…!

しかし逃げる作業員に対し、激しいバリバリ電気音。部屋全体が点滅し、作業員、激しく感電する。驚く全員。

そして音と照明、静まり、間。

作業員 …茜。迎えに来たよ。

茜 あっ…?!

千紘 えっ、作業員さん？

作業員、帽子を取り顔を上げると総白髪の重となっている。

重 おらはそるそる限界だ。これからはお前がやんねばなんね。

茜 いやだ…

重 お前がやんねばならん…! お前がやんねば、%&\$%&#。%%&&%、%%\$#%\$。&%%\$%#%&.&&。

(津軽弁が濃すぎて何を言っているのか分からない)

全員 ?

千紘 え、なんですか？

茜 (劇場出入り口に向かって逃げ出す)

千紘 あっ…!

重 逃げてても無駄だ! (手から銀色の蜘蛛の巣テープを放つ)

茜 ……!

重 お前がこの先、この世の中を、明るく照らすんだ。

茜 ……。

重 お前が、お前自身の力で、この…

その瞬間ジジッと小さな音がする。皆それに気づく。そして棚の上のダイナマイトとブルトニウムに赤い照明。

全員がそれを見る間。

そして一香、慌てて声をあげると同時に、電気が消える。暗転。

静かな間のと、大爆発音。
しばし続く爆発音。(※この間にドアを映写時状態に。キューで音楽イン。映像へ)

FILM ENDING 見なかったら

中年キャスター ニュースです。東京都南西部で大規模な爆発がありました。繰り返します。

ただいま東京都南西部で、大規模な爆発がありました。

それと同時に国内外の景気は再び悪くなり、温暖化が進み、世界各地で紛争や戦争が再開…

またこの影響で国内の一切の電力供給が途絶え始め…、全国的な大混乱が予想されますが………。

(原稿を置いて) あ。全て、見なかったことにします。

さて次のニュース。山口県の徳山動物園で、レッサーパンダの赤ちゃん、誕生です。

女レポーター (動物園前で満面の笑み) はい！

プツと映像、途切れる。

そして消えていく、街中の電気、家中の電気。真っ暗に。

ポツと灯る煙草の灯り。寂しげに煙草を吸う五朗、月明かりに照らされ、また消える。

ポツと灯るペンライト。寂しげにライトを振る一香ファンの初老男性、月明かりに照らされ、また消える。

月明かりで、道に落ちているヘッドホン。メルカリで売られる。マネティジユゴンのプロマイド。二人の活躍の様子。

それぞれの国に里帰りをするドアノブたち。

ノブ、サブ、ボブが、それぞれ、列車で、船で、飛行機で。

飛行機の映像から、旅行を満喫しているらしい、零奈の脳内物質たち。

世界各地の大自然の脅威の前に、大興奮。数パターン。

時々、走り回るアドレナリン。とても楽しそう。

やがて彼らの背後の夜空に、地球が浮かぶ。

誰も居ないカラフルなカーテンの部屋に、1/0の文字。

誰も居なくなった六ヶ所村の草原に、1/0の文字。

様々なフロントと色で、多重的にタイトル。

登場した小道具混じりで、キャスト紹介。

紹介が終わったら、舞台上に照明。

全員、舞台上に並んで一礼。そして退場。